

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第142号（2018年3月）

風に吹かれて（119）

白井啓治

・行こか戻るかお天候様の迷うてござる

この冬は、豪雪のニュースなどで随分と寒い冬であったという印象であるが、私自身の事を考えると、それ程に寒い冬であったという感じはない。自分の部屋でストーブをつけることが殆どなかった。足温器一つで十分間に合った。指先が凍るということもなかった。

とは言え、ワンニャン3sのいる部屋にはエアコンがつき炬燵が入っており、3匹はその部屋から出ようとしなかったことを思うとやはり寒さは厳しかったのだろう。

歳をとると何に対しても感覚が鈍くなってくるというが、もしかしたらその所為なのかもしれない。真夏の猛暑に暑さを感じないで、熱中症で病院に運ばれたという老人のニュースが度々報じられたが、私の寒さを感じなかったのも、若しかしたら老人性不感症だったかもしれない。しかし、外へ出れば厳しい寒さに震えたのだから、不感症と言う訳でもなかったようだ。

さて、当ふるさと風の会は、ふるさと起しを念頭に「ふるさと」の歴史・文化の再発見と創造を考

える」をテーマに会員は自由に書きたいことを書いて、思いを語ってきたのであるが、この五月で創刊十二年を迎えることとなった。ちょうど干支が一回りしたことになる。いわばひと昔が過ぎたことになる。振り返ればよくぞここまで続けてこられたものだと思ふものがある。

ふるさと風の会を立ち上げる時、この町の不思議を思ったものだった。ちょうどふるさと活性化を声高に叫んでいる頃だった。平成の大合併の時に、町おこしの機運も盛り上がりつつあったのだろう。しかし、町おこし、街の活性化を叫ぶにしては、問題の提起も聞こえてこないし、問題の提起がないのだから当然であるが、現状に対する異論・反論も全く聞こえてこなかった。このままだと右肩が負けるだとか、損をしちゃう、等の声ばかりが聞こえてくるだけであった。

町おこしであれ、組織の活性化であれ、そこに必要なのは問題の提起とそれに伴う異論反論の渦が起ることである。しかし、この地にあるものは反対と言う拒否反応だけであった。これでは町おこしなどできる筈もない。それは現在にも変わるところではない。

歴史の里とは言いがた、自分たちの歴史を検証しようという人たちの姿は見えない。口を開けば1300年の歴史だと自慢氣にいう。1300

年の歴史はこの地にもある。それこそ霞ヶ浦周辺に点在する貝塚群などは1300年どころではない。内向きの井の中の蛙のままにいたら、そのうちに住む人も居なくなってしまうだろう。

敢えて過激に物言う主筆であるが、こうして一昔となる十二年、干支の一回りまで一緒に歩いてきてくれた会員の皆さんにはただただ感謝である。しかし、この十二年を振り返り、残念に思うのは、異論反論の小さな渦も起らなかったことである。ごくたまに異論反論の渦になりそうな気配を見せるが、渦を巻く前に消えてしまったのは残念中の残念であった。

連日興奮を与えてくれた平昌オリンピックが終わった。日本の選手たちには大いに拍手を送りたい。しかし、オリンピックそのものを見るとスポーツの祭典と言うよりも政治利用の場としての感を強く持ったのは私だけではなかったろう。

実際に、選手たちにとってはオリンピックでの成績よりもワールドカップの順位の方が重大問題といえよう。オリンピックが終り、選手団の解散される間もなく、各選手たちはワールドカップに出かけて行った。

競技者としての本戦はワールドカップにあり、そこでの勝利の方が、競技者にとっては遥かに名誉なことなのだろう。特に、今回のようにWOCへの放送権を高額で買取ったスポンサーに配慮しての競技時間の設定など、競技者にとっては有難迷惑もいい所である。通常はあり得ない深夜の屋外競技なんて、まあお祭り参加だから、と思う以外ないだろうと思う。俺の真価はワールドカップで見てくれ、と言っているのではないだろうか。

大脳進化による功罪

菅原茂美

人類の大脳が膨らんだ事は幸か不幸か、いつも疑問に思う。大脳の発達には確かに偉大な文明を産み、多くの恩恵をもたらしたが、一方数えきれない知能犯罪や戦争は止む事がない。最大の悲劇は兵器の威力拡大。

偽文明の発展により、人体は軟弱化し、交通機関など社会インフラが過剰気味。その為、地球環境は汚染し資源枯渇。子孫達の安全な生存を脅かす。頭脳拡大は差引勘定したら、マイナス面が多過ぎないか？ それゆえ、冷静に文明内容を吟味し、その速度をもっと緩やかに転換するのが、21世紀の我々の責務ではないのか？

近年囲碁・将棋界で、人工知能(AI)が世界チャンピオンに勝っている。その内、AIが絵画・作曲・文学界を占め、更にロボットのフィギアスケーターが銀盤を華麗に舞う。人類の誇りは一体どうなる？ 未来はともかく、これまでの大脳拡大による「功・罪」を検討してみたい。

*

そもそも人類発祥の地はアフリカ。今から、700万年前、チンパンジーとの共通祖先から、人類の祖先是枝分かれして、直立二足歩行を展開し、明確にヒト属が誕生した。とはいえ人類とチンパンジーとのDNAの差は1%のみ。

その前、今から2億年前、恐竜の一部から恒温で哺乳育児する変わり者の生物集団が派生。恐竜の陰で脅えて暮らすネズミほどの大きさの「哺乳類」の誕生である。ところが6550万年前、中米ユカタン半島に、直径10kmの巨大隕石が衝突。全盛を誇る恐竜は滅亡した。すると、哺乳類の食虫目(モグラ目)の中から、「霊長類」(サル目)が分離

し、後にヒトにまで進化する。霊長類とは「動物の首長たるもの」という意味であり、12科・60属・180種。原猿類、新・旧世界サル、類人猿、そしてヒトを含む。多くは樹上生活で昼行性。指の殆どは扁爪(ひらづめ)で5指。雑食性で立体視可能。そして大型類人猿の中から、まず1400万年前、オランウータンが分離し、1000万年前ゴリラが分離。更に今から700万年前チンパンジーからヒト族が分離し、直立二足歩行を始めた。アフリカで発見された化石人類サヘラントロプス・チャダシスが直立二足歩行をしていたとする証拠は、頭蓋骨化石の頭底部の中央に、脊柱に通じる「大後頭孔」が空いているからである。直立すれば、頸椎最上部の真上に頭部が載っかっているわけで、当然大後頭孔は中央になければならない。もし四足歩行なら、頭部は頸椎先端の前にぶら下がっているわけで、大後頭孔は、頭底部の中央より、もっと背側に空いている筈。

*

さて問題の脳容積を、現在の大型類人猿で見れば、オランウータン441ml。ゴリラ500ml。チンパンジー394ml。最初の人類・チャデンシス380ml。そして現在の新人ホモ・サピエンス1350ml。3万年前に滅亡した旧人ネアンデルタールレンシス1450ml。人類は700万年かけて脳重3.5倍、身長はほぼ1.5倍伸びた。

ところが、大脳は大きければ賢いとは限らない。1800mlもありながら痴呆の人もいたし、ノーベル文学賞のアナトール・フランスは普通人の74%、1000mlしかなかったという。

一般的に動物の知能比較に、体重と脳重から「脳化指数」(EQ)が用いられる。方程式は、

【EQ=定数×大脳の重さ÷体重の2/3乗】

それによると、ヒトのEQは 0.89 で桁外れに大きい。イルカ 0.64 、チンパンジー 0.3 、ゾウ 0.22 、クジラ 0.21 、カラス 0.16 、イヌ 0.14 、ネコ 0.12 、スズメ 0.1 、モグラ 0.08 、ウサギ 0.07 、ウシ 0.06 、ブタ 0.05 。

*

さて人類の大脳はどうやって巨大化したか？

大脳膨張のスピードは、決して時間と並行して徐々に膨らんだものではない。最後の数百万年で、急速に膨張したものである。人類の大脳が膨張した原因は①前足が「手」になった②大脳への流量が増加③「矢状稜」が消失④脱毛。

ご先祖が樹上生活から地上に降りた頃は、四足歩行。ところが地上にはネコ科の大型肉食獣が多数。捕食者から見れば絶好の餌食到来。やむなくご先祖は短い脚で立ち上がり、遠くを見極め、高い視点から、より早く敵を発見し仲間へ危険信号を送り、より早く逃げ延びた者のみが子孫を残す事となる。太古の背伸びがより脚を長く延ばす願望となり、深層心理として現代人にも受け継がれ、理想のスタイルを求める事となった。そして脚が伸びてくると四足歩行より、二足歩行の方が、より早く移動できるので習性となり、骨格も合理的に変化していった。

最初は4足歩行から3足歩行となり、前足の片方は握り拳(こぶし)のナックルウオーク。そして空いた片手にはエサや子供を抱える。その内、手の指先を器用に使い、道具なども色々工夫するようになった。初期段階ながら、言語もわずかに発達し、大脳は少しずつ発展を遂げ、高度に進化する下準備が整った。即ち、直立二足歩行で、前足がフリーな「手」となった事が、大脳発達の原動力と言える。

一方、オーストラリア・阿德レード大学のセイモール教授によると、「脳が大きくなったのは大脳への流血量が増したから」と言っている。300万年前に生息していた猿人化石の頭蓋底を貫通する二つの動脈孔の太さに対し、現代人のそれは3.5倍、流血量は6倍増加と言っている。その為ニューロン（神経細胞）は活性化し、複雑な思考・学習・推論ができるようになった。大脳が活性化するためには、血流から大量の酸素・栄養の補給が必要であり、そのためには、大脳への流血量が大きく左右する。

更に400万年前く200万年前に生存した猿人アウストラロピテクス・ロブストスには、頭頂部に「矢状稜」（しじょうりょう）という骨突起があり、下顎からの咬筋がガッチリ結びついていて、今のチンパンジーやゴリラにも存在する。固い繊維質食物を噛み砕くために強い咬筋は不可欠で、頭頂部は堅い矢状稜骨でガッチリ固められていた。これでは、大脳容量が増加する余裕などありはしない。自由になった手先で食べ物をほぐし細分化するなどしてある程度柔らかくなると、そして後に「火」を用いるようになると、尚更、食物は柔らかくなる。当然、頑丈な咬筋は不要となり、突出した顎骨も小さくなる。我々ホモ・サピエンスの親である原人ホモ・エレクトスには、この「矢状稜」はなくなっている。人類が明確に「火」を用いるようになったのは40万年前からである。しかし200万年前の人類が食べた骨の化石には「火」の跡があるが、自然の火災によるものか、人為的な火の使用によるものかの区別がつかない。いずれにしても、エレクトスからは、「矢状稜」はなくなっており、頭の上の重くて堅い蓋はなくなった。そして木から降りた頃、先祖は皮膚の色は白く

体毛は黒。しかし平地は木陰が少なく紫外線直射によりDNAが破壊される。そこで自然に体毛を失い皮膚細胞はメラニン色素でガードしUVカット。すると汗腺が発達し、長距離を走っても汗で体温を放散でき、動物は瞬発力こそあるが体温上昇で長距離を走れない。獲物を楽に捕獲。貴重な蛋白源を手に入れる事ができた。これが大脳発達の重大な原因となる。こうして幾重にも大脳拡大のための準備は進められた。

【現在の成人の頭蓋骨は、脳頭蓋・顔面頭蓋・耳小骨など28個の骨からなる。しかし新生児は45個である。人類は大脳が異常発達したために出産の折、新生児の頭が大き過ぎて産道を通過しにくい。そこで新生児は、頭骨を重ね合わせて体積を減じ、産道を通過し易く進化した。出生後、成人になるに従い、骨融合し、28個となる。鳥類や草食獣などは生まれたらすぐ親とともに歩ける。しかし人類は胎児の時に既に頭でっかち。それゆえ安全に出産するため、未熟児で生まれ、長い保育期間を要する事となる。】

新人ホモ・サピエンスは、長い準備期間を経て、他の動物には見られない巨大な大脳を獲得した。以上の前提を基に本題に入る。

＊

● 大脳が膨らんで悪事を重ねる

己の縄張りを守り、食糧と、繁殖相手を確保する：これは全ての生物の基本姿勢であろう。その為の日頃の戦いを、私は醜い戦いとは言わない。40億年前、生命誕生以来の生命の原則だからである。単細胞時代、ウカウカしていると、隣の細胞に取り込まれ、エサにされるかもしれない。防衛手段として、仲間と手を組み、多細胞となり体を大きくして、物理的にも優位に立つ。

昆虫や魚なども、保護色や擬態などで敵を欺き生き残るのに懸命だ。それゆえに人類もある程度の「欺瞞」や「詐欺まがい」もやむを得ない。弱い者が生き残れば、それが累積し、いずれは滅亡に繋がる。生存競争の激しいこの世にあって、正義感や倫理感のみでは生き残れない。ある程度の腕力・知力に、遺伝的に強い免疫力を備えた健康体こそ、生存競争に勝ち抜ける。

成人の日に前金で支払っておいだ「晴れ着」が着れない詐欺事件。人生の門出に泥を塗る超悪党。許せぬ。更に自殺希望者を巧みに誘い、金と性欲のために9人も殺害した悪党もいる。特殊詐欺など老人の血のにじむ金銭を奪い盗る。

知能犯罪の典型は、有名大学を出た社長が、グローバル化時代を迎えても頭の切り替えができず、部下に利益増を強要。やむなく部下はガンバリズムで、品質管理不正を働き、データ改竄・捏造など知能犯罪の常習化。

「洗脳」には恐れ入った。戦中、天孫降臨・神風など空論で国民を駆り立て、結果として軍人230万人、一般80万人計310万人の人命を奪った。オーム真理教はサリンを撒き、イスラム国は自爆を強要。脳ミソをジャブジャブ洗うと、人はこれほどに戦争・犯罪・テロを平気でやるのか？

さて大型類人猿で、オランウータン、ゴリラ、ボノボは極めて温厚な性格だが、チンパンジーと人類だけが仲間同士で殺し合いをする。チンパンジーは子供を殺して食べる事もある。人類の殺人癖については、列挙できないほど残酷な例が無数にある。米国では銃規制ができない。

そして規模が大きくなると、必要以上の狡猾な権力独占。それを楯に首領の周りにへばりつき、世襲的に己の安泰のみ維持しようとする輩。これ

が許せない。例えば170万人の飢餓・虐殺をしたポ
ルポト政権。ポルポト個人は日頃「唐辛子1本だ
って盗んではいけない」と口にしていたという。
しかし取り巻き連中が、ポトの権力を祀り上げ、
己の安泰のため恐るべき虐殺を繰り返し、歴史に
残る最悪の悲劇を残した。狡猾な取り巻き共の策
略が、醜い歴史を重ねる。

権力者と奴隷。貧富の格差。なぜこんな現象が
生じる？ 結局ずる賢い者が生存に有利な条件を
独り占めする。大脳を狡猾に働かした者が生き残
る。温厚な人格者は容易に生き残れない。

現在の北朝鮮。核武装の妄想。世襲とはいえ暴
君を祀り上げ、世界8か国の15・000発の核
保有国の仲間入りを狙う。しかも独裁を維持する
ため、国民を犠牲にして体制維持に全力を注ぐ。
更に首領の肉親の殺害さえ実行。取り巻き共が自
分を護るため、恐怖政治を確立する。

私が一番嫌うのは、文明進化イコール武器の威
力拡大。世界中に仲違いをさせ、その武器を高く
売りまくる。平和反対の大国がある。こんな現象
は、時代が進めばいい加減は正されるかと思いき
や一向にその気配はない。核兵器に化学兵器や生
物兵器。21世紀を迎えたのだから、大脳を活用し、
いい加減目を覚ますべきである。

次に私が腹を立てているのは、自然破壊と資源
枯渇問題。なければならないでも済まされるような、
生活にいくらか便利であれば次から次と発明し特
許をとる偽文明。物を作るといふ事はそれだけ屑
ができ、エネルギーを消費し、環境を汚染する。
人間は捨て所がないほどにゴミを生み出す。水・
空気・土壌を汚し、子孫の安住が危ぶまれるほど
に環境を汚染する。

そしてウナギやマグロを捕り尽くす。絶滅危惧

種の増加。鉱物資源を求めて月面までも探索しよ
うとしている。理性も道徳もなし。早い者勝ちの
強欲の競争世界。地球温暖化はデッチアゲの偽科
学とうそぶく愚かな大統領もいる。

犯罪多発など問題は無限にあるが、最後は、「人
口問題」。種を永續させるために生物は、あらゆる
手段を講じて、己のDNAを残そうとする。それ
はいいが、人類は食糧や土地があるうがなからう
が、むやみやたら子孫繁栄に邁進。野生の狼は食
糧が少なければ交尾をしない。動物でさえ弁えて
いる道理を、ヒトはなぜに実行できないか。欲望
を制御できない哀れな動物。

地球の人口収容能力は50億人と言われる。しか
し現在すでに74億人。近く100億人は必至。当
然、難民や移民問題が勃発。諸悪の根源は人口過
剰。日本の縄文時代は、現在の千分の一の10万人
であつたという。全世界がこの密度なら戦争は起
きない。さりとて他の惑星に移住など、余計な考
えを持たず、根本的削減計画を、まず考えるべき
である。

*

◎さて次は大脳を膨らました事による効果

その第一は何といつても「衣食住」の安定化で
あろう。7万年前、サピエンスがアフリカからア
ラビア半島に移住してきて間もなく、インドネシ
アのトバ山が大噴火、煤煙で地球全体に太陽光が
十分届かず寒冷化。そこで人類の祖先は初めて、
身に纏うものを用いるようになった。衣類の元祖
である。この時アタマジラミから、コロモジラミ
が分化した事が、現在DNA鑑定で分かっている。
衣類の充実がなければ、シベリアや北米への人類
進出はなかったであろう。

「食」の充実は、狩猟採集の遊走生活から、農

耕牧畜の定住生活へシフトして、決定的に大改善
されたと言える。何といつても食糧の安定的確保
こそ、人類繁栄の原動力と言える。

安定した「住」なくして文明開化は考えられな
い。害獣や他人の侵入を防ぎ、家族の絆を深める
憩いのねぐら。地域や国家安定の基礎。

産業革命と科学の進歩は、功罪どちらともいえ
る。蒸気機関の発明など産業の急速な発展に貢献
した。大航海時代を迎え、地球は急に広く活用で
きた。科学の進歩は、人類自身の科学的進化の過
程を明確に確認でき、宇宙への認識を広げた。暗
黒物質・暗黒エネルギーの解明にまで近づきつつ
ある。しかし反面、産業革命は、地球環境を汚染
し、資源を枯渇させ、科学の進歩は、武器の威力
拡大や、残酷な化学兵器・生物兵器の開発などに
繋がり、人類を不幸に誘う。科学の進歩は、ほど
ほどでよろしい。

*

最後に宗教や道徳心の涵養は、世界を平和に導
く道標として、広く定着している。倫理の確立な
くして世界の真の平和は訪れない。人類は集団生
活を安全に営むために、「ルール」というものを発
明した。その厳守こそ第一。

最近巷にはこの世の最後を告げる「終末時計」
が、あと残り2分などと騒いでいるが、折角膨ら
ました大脳をフルに活用し、そんな陰鬱な話題は、
軽く吹っ飛ばしたい。そして医学の進歩こそ、フ
イジカル・メンタル面で共に人類に安寧をもたら
す最後の切り札である。何はさておき今後は、医
療・福祉の確実な定着のために、しっかりと環境整
備する事が、第一と考える。

人類は大脳を膨らませ、功罪この程度の影響力
がある事は判った。それゆえ忌まわしい過去が未

来を拘束してはならない。されば「罪」の方は以後活躍できぬよう、この程度で封印し、これからは、全知全能を傾け、本当に人類に役立つ事にも全力投球するよう、望んで止まない。

いしおか雛巡り

兼平智恵子

おかえりなさい いしおか……今年も去る二月十七日より三月三日まで石岡市中心市街地商店街に雛さまの微笑みの花が咲きました。

石岡駅前西口の文化伝承館では十段飾り千体のおすましの雛さま。各商店先でのお出迎え雛さま。駅前御幸通り西に向って丁字路左側にある、まちかど情報センターでの毎回楽しみの歴史絵巻情景飾りは……。役人であった紀貫之が仮名を使って書かれた初めての日記文学といわれる「土佐日記」と物語文学の祖といわれる「竹取物語」の二つの古典をもとに雛さま達の大舞台が繰り広げられていました。

紀貫之とその妻は四、五年にわたる土佐の国での国司の任務を終え、師走のある日、土佐を舟で出発します。舟が岸を離れ、都に向かうに従い、二人は哀しい想いとらわれます。赴任地である土佐で大切な娘をなくしていたのです。波立つ海に映る月を見るにつけ、その想いは一層苦しく二人の心を乱します。舟での長い旅も終わり昔住んだ家に戻りますが、娘がこの世にいた頃を思い出させるものばかり、二人は娘を思う歌をたくさん詠みましたが、その哀しみは癒されることはなかったのです。終わらない両親の苦しみを雲の上から見ていた娘が、かぐや姫の姿で龍に乗って二

人のもとに……この先もう少し続きますがこの辺にて。とにかく雛さま達が演技じっている姿、情報センターの職員の皆さんの演出には、今年も感心、感動の大拍手でした。

常設展示場“みんなのひろば”では、心優しく健やかに成長するようにと思いを込めた手作り雛さまや鉄道模型が走る中に飾られた微笑みの雛さま達。

物産店“まち蔵 藍”では、登録文化財となっている江戸時代後期に建てられた一階そして中二階に、年代物の雛さまから現代のものまで、しとやかに、あざやかに揃いの雛さま達。

こちらでは石岡市内の小学三年生の校外学習に同行しての見学でした。店先での、帳場格子や大福帳、昭和の初め頃に使われたミシン、太い柱、中二階に上がる短く急な階段、皆さん声もなく慎重に、慎重に、天井の低い中二階の部屋で迎えてくれた雛さま達に、ほっと一息。みなさん自主的にサッと一列に正座しての横並び、雛さま達とのご対面。行儀良い生徒さん達に感心し、ほほえましい光景に笑みがこぼれました。

金刀比羅神社の境内、約二メートル位の舟に乗った雛さま達。意気洋洋。

常陸国總社宮では、神楽殿にいくつもの段飾り。石岡市ふるさと歴史館では珍しい掛軸に描かれたお雛さま。只今館内一階企画展で行われている、石岡の昔ばなしの世界「むかしむかしの物語」の展示の中に昭和四十年代と大正時代初め頃の雛さま達が彩どってました。

また金丸町通りにある、釣り具屋さんには、江戸時代、明治、大正、昭和の珍しい、価値ある雛さまが、釣り具商品の中に、そこかしこ、品良く、また滑稽にも、と色々工夫されての展示。釣り具

の他自慢とするおかめ、ひよっとこ、きつね等のおまつりストラップと楽しく、華やかに微笑んでいました。普段の静かな街並みは、やさしいほほ笑みに包まれていました。商店街の皆さんお疲れ様でした。有難うございました。

○梅の木に

金 銀 銅 氣くばり咲いて
ありがとう

智恵子

ピョンチャンオリンピックの年に

地域に眠る埋もれた歴史(36) 木村 進

石岡に残されている道標 3 つ

(1) 若松町の道標、追分
追分(おいわけ)とは道の分かれ道となっている場所のことだが、一般には分かれ道に置かれた道しるべ・道標なども追分といっていた。

石岡の街にも江戸時代の追分がいくつか残されていて、その中で気が付いたところを紹介します。まず、柿岡街道の若松町信号の分かれ道にある△エリアの真ん中に置かれています。以前はこの△地帯は芝生で覆われていたのですが、いつの間にかコンクリで固められてしまいました。また信号の正面にはガソリンスタンドがありました。このように時代と共にまわりの姿は変わっていきいますが、この昔歩くための道しるべ「追分」はどこか懐かしく郷愁があります。



この石の追分には、元文二年 巳四月日

「左かきおか まかべみち」

「右 うつの宮かわらい道」と彫られています。

元文二年は1737年です。

左へは柿岡街道で、今も柿岡を通り上曽峠を越えて真壁に続いています。一方右へは瓦会を通って宇都宮へ行く「宇都宮街道」だったようです。

しかし、この宇都宮街道はこの先、鹿の子C遺跡の場所で常磐高速で遮断され、その先は矢向へ向かいますが、柏原工業団地で途切れてしまいました。このため、この宇都宮街道は今では忘れられてしまったようになっていきます。おそらく山崎宿の丘の上を通りギター文化館へ続く高台の道を通って瓦会へ通じていたものだと思います。途中、嘉良寿理（からすり）という一風変わった名前のところに大きなスタジイの木がある貴船神社があり旅人の休憩場所だったのかもしれませんが。この道標の制作年は元文二年となっていますので。徳川將軍「吉宗」の時代で、当時の街道の役割なども気になります。詳しいことはわかりません。

奈良・平安時代頃には瓦会の窯で焼かれた瓦を国分寺などへ運んでいた道であったとも考えられる。また江戸の頃には、宇都宮方面から石岡（旧国府）に入る人馬の道として使われたのだろう。

一方この追分から左の柿岡街道は、今はないが松並木が続いていたという。

この追分のある場所が、北西方面から府中の街への人馬の入口だったのです。

しかし、宇都宮街道などは時代とともにルートがわからなくなってきたしまっているおり、この追分道標がとても貴重なものとなっています。

大切にしていきたいですね。石岡の歴史案内書などでもあまり書かれたものではありません。

この追分についても少し調べた内容を書いてみたいと思います。

〈道標 大棒杭〉

昔、道路の分岐点を追分といいましたが、棒杭（ぼっくい）とも言っていたようです。

道の分かれ道に道案内を示した棒状の杭を埋め込んでいたのでしょう。この棒杭を「ぼっくい」と読みます。「焼け棒杭に火がついて…」などと使われるあの棒杭です。

私も昔「焼けボックリに火がつく」などと覚えていましたので、結構多くの人が今でも松ボックリのようなボックリと思っているかもしれません。でも、焼け終わったと思っていた棒杭（ぼっくい）の火が消えていないでまた火がついたことをいうのですから棒杭が正解です。

さて、実はこの宇都宮街道と柿岡街道への分かれ道にも棒杭があったもので、今の道標が300年ほど前に作られたのですから、その前には木の棒杭があったのでしょうか。

書物を読んでいるとこの場所は「大棒杭（おほぼっくい）」と言っていたというような記事を見かけました。

江戸時代にここ府中は松平家2万石（府中だけだ

と1万石の町でした。藩主は江戸にいてほとんどこちらには来ません。

陣屋が現在の石岡小学校の場所にあり、すぐその近く（青木町から番丸町にかけて）に現在の刑務所のような牢屋のある場所がありました。

その罪人たちは逃げてもわかるように赤い服を着せられていて「赤ちゃん」などとも呼ばれていました。

しかしその罪人が釈放される時に使われたのが、この大棒杭の方向の門だったと言われています。

なぜなら、これは江戸の方面及び水戸方面（泉町）にある門はお江戸の殿様、また水戸様の方向ですから、罪人を釈放する方向とはできなかったためといわれています。

また、昔、若松町は1710年頃まで「長法寺町」と呼ばれていました。長法（峰）寺という大きな寺があったのです。この寺は明治3年の長法寺の火事とよばれる大火で焼失してしまいました。

ここ府中（石岡）は馬の集積地としてにぎわいました。まわりから馬が集まってきており、馬市が開かれていました。宇都宮街道から、また柿岡街道から馬が集まってきたといえます。

そしてこの長法寺の境内で市が立ったようです。この寺のあった場所には現在「木像十一面観音（指定有形文化財）」が置かれた小さなお宮（保管蔵）があり、馬頭観世音の碑が建っています。

明治3年の大火は昭和4年の大火と比べあまり記録に残っていませんが、矢口本陣や鈴の宮の近くの新地八軒も焼けるほどの大火で500戸程が焼けたと言われています。

また、昔の言葉で「長法寺のオン出し」というのがあるそうですが、これは罪人をこの方向からオン出したことからそうように呼ばれたといえます。

今では全く使われることもありません。

ところで、現在石岡のお祭りには「若松町」として参加していますが、最近まで祭りの書類では「長法寺町」となっているものを何度も目にしています。

十一面観音のある場所は細い横道に入ったところですが、昔はここが宇都宮の方につながる道だったのでしょうか。

観光客がこの十一面観音の場所に来て恐らく、このようなことは考えないでしょう。

現地には十一面観音についての説明だけしかなく、何故馬頭観音が立っているのかは理解できないように思います。

また、東京国立博物館には「長法寺」の銘の入った名刀が残されています。ここ長法寺から鎌倉に移った「長法寺（長峰寺正俊）」という名刀鍛冶が造ったものと考えられているそうです。

さて、この棒杭（ぼっくい）ですが、昔は交通機関という舟がかなり重要な役割を占めていたことが、川岸に舟をつなぎとめておく棒の杭を水の中に突き刺しておいてそれに繋いでいました。この棒も棒杭（ぼっくい）とよんでいたようです。

へト杭（ぼっくい）

棒杭（ぼっくい）という名前もいろいろ気になりますが、同じ「ぼっくい」という読みでも「ト杭」と書く地名が千葉県印旛沼近くにあります。

「ト」はカタカナのトではありません。トウ（占う）という字です。塚原ト伝（鹿島の剣豪）のボクです。

以前「安食（あじき）」にある龍角寺に行つてこの地名が気になっていたものです。成田線の駅名にもかなり気になる駅名がありますが、こちらはまた別な機会として今回は「ト杭」地名について考

えてみました。

「ト杭」で、「ぼっくい」と読みます。

この「ト杭」は、印旛沼から安食周辺の地形の変化を考えるのにとっても大切な地名だと思われます。

「ト杭」という地名は地図では「安食ト杭」と

「酒直ト杭」と出てきますが、どちらも現在は印西市で、安食や酒直は共に栄町にあり、ト杭のつく地名とは行政市町村が異なります。その両者の境を「長門川」が流れています。今ではこの「ト杭」地は田んぼが広がるいわゆる干拓地だと思われます。昔、この地が沼地となっていた時に川の境に木杭を並べて打って土を運び入れて田を作ったのではないかと考えられます。

北側は将監川で、東が長門川に挟まれています。石岡の高浜近くにある「八木干拓」などは政府の農地を増やせの号令のもとに霞ヶ浦にたくさん木杭を打ち込んで農地を作ったそうです。しかし底なし沼のような霞ヶ浦では木杭をいくら打つても安定せずに流されてしまい干拓には苦労したといわれています。

この安食（あじき）辺りの地形は流れがほとんどなく木杭を打ち込めば干拓もうまくいったのではないかと思います。

少し歴史的にいつ頃なのかを見て見ました。

ウィキペディアで安食ト杭（アジキボックイ）を引いてみました。

「江戸期は安食ト杭新田であり、下総印旛郡のうち。寛文年間安食村ト杭野を開発して成立。」

はじめ幕府領、元禄11年から佐倉藩領、享保8年から幕府領。村高は「元禄郷帳」294石余、享保13年の見取場検地により252石余が改増、「天保郷帳」

「旧高旧領」ともに561石余。

小林新田・酒直ト杭新田、および笠神埜原（十四ヶ

新田を含めた地域は、枝利根川（将監川）と印旛沼に接しており、水害が多発したため早くから普請組合を結成している。」と書かれています。

やはり水害もかなり起きていたようです。また江戸時代の初期にすでに「安食村ト杭野」と呼ばれていたことがわかります。ここで米作りが行われ、石高も増やされていますがたびたび水害が発生した事がわかります。

また「ト杭野」と呼ばれていたことから干拓のために棒杭を打ち込んだというよりも更に古くからこのト杭という名前が使われていたようです。

「ト」（うらない）という字が使われていますのです。こし違った意味合いがあつた可能性もありますが、もともと「棒」という字も「木を奉じる」と書くように手で捧げられるほどの長さの木片を指す言葉ですから、これが「ト」と同じような意味合いを持っていたとも考えられます。

この「ト杭」という地名はここ以外にもう1カ所あるようです。それは稲敷市の東端の横利根川沿いです。ここも恐らく江戸初期またはもう少し前に田の耕地を確保するために川沿いに木杭を打ち込んだ場所だったのかもしれませんが。現地にも足を運びましたが今では特に何もわかりませんでした。

異国の息子へ

伊東弓子

二月の半ばを過ぎた今頃になると思い出す。忙しい合間をみては韓国へ行く支度をしていたあの

頃、初めて孫が生まれる時だった。息子となって家族が増える喜びを共に味わいたいし、手伝いもしたかった。

私も若かった。異国へ行く不安などなく、張り切っていた十五年前。あの息子と初めて会ったのは、迎えに来てくれた飛行場だった。小柄で優しさを感じる雰囲気、安心したのはつきり覚えていた。身内になった息子を私なりの感動で挨拶をした。

夜の高速道路を走ったことがなかったので驚いた。さまざまな色彩が飛んでいく。流れが続いていく。こんな素晴らしい光の道は初めて見た。日本での夜の高速道路など走ったことがなかった。間もなく産まれてくるだろうお腹を抱えて幸せな二人の家庭生活に降れた日々の一ヶ月余り、私もその喜びの中にどっぷり浸っていた。

孫の成長、二人めの誕生と行かねばならない気持ち、湧いて、喜んでくれるのをいいことに毎年出かけて行った。いつも家屋を乗せて飛行場まで迎えに来てくれた息子。滞在中には関係ある所や希望する所へ連れて行ってくれた。

高速道路よりも、山路を走ったり、農村地域を走って貰う方が安らぐ気持ちだった。風景が確りわかる。人の姿が目に入る。生活が見えてくる。

春、先駆けて赤紫の花が山々に見えた。木々の高い枝に鳥の巣があった。農作業をしている男の人が見えた。珍しいこと牛が草を食んでいる。楽しい旅だった。

生まれ育った安東へ連れて行って貰った。東方向へ随分走って、日本海側に近い所だった。山並みが目の前に立ち塞がり、すぐ下に大きな湖が横たわっていた。深いのだろう、深緑の水面は訪れた私たちを吸い込んでしまいそうだった。今はダ

ムになった湖だという。祖父母の時代までは、この湖で漁をし山で狩をし、山間の土地を耕して畑を作り暮らしていた集落が沢山あったという。下って行って本家に寄った。犬が放し飼いで飛び廻っているし、鶏もあちこちで土をかつちらかしていた。

親戚だろう近所から人が集まってきて、みんなで昼食をよばれた。ダムが出来てからは漁は出来なくなった。狩もしなくなった。みんな町へ出て行ってしまった。村人中、淋しいもんだ。と呟くように言っている年寄りの表情も重い。

息子の家は分家だったという。少し登った所にあった。廃屋になっていたが、両親と子供たちが生活していた匂いが漂っていた。オンドルの跡も皿や碗の欠片も、遊び道具も転がっていた。親達、が苦労した日々の姿や息子達の走り回る姿が浮かんてくる。

親の墓は、もう少し高い所にあった。二つ並んだ墓の中から「苦しみ、悲しみは雲と飛ばし、雨に流し、五人の子供の家族に幸あれと風に伝えて貰っているよ」と聞こえてきたような気がした。

今頃植えるのが一番いいと言って春の彼岸時、息子の持っていた苗木を墓の隅に植えた。あの木は大きくなったろうか、と時々思う。

夏、オエドに行つた。紅海に面している海岸で、引き潮で泥の海が延々と続いている。ソウル飛行場の海と同じだった。即てはこの所は平地になつてしまうのじゃないかと思うような風景だ。夕陽は雲とも海とも泥ともつかない中に沈んでいこうとしていた。海魚のご馳走を食べながら、あの先に極楽浄土があることを、この地の人も願ったのだろうか。

帰る途中、山の近くに畑を借りているので寄つ

て行こうということになった。絵の中にあるような山村の細い道を走った。道沿いに細い河がある。降りて昼の暑さを忘れさせてくれるだろうと、手足を水につけた。

痩せた土なのだろう、出来栄はまあまああの野菜を土産にした。畑仕事の好きな息子は、引越す度に畑を借りて、家族を連れて野菜づくりをしていた。今も続けているのだろう。

秋、紅葉はどうかと出かけたこともあった。日本のように、公園に境内に地域にと人の造った紅葉はなかった。大体、楓という木を見たことがない。気候や土地、他の条件が違うのだから当たり前だ。茶色系の落葉、立木の色どりの美しさを見た。松の緑がその中であって一層よかった。そんな木々の間を歩いた。

日本に渡ってくる以前の佛教、又朝鮮半島に根づいて今なおある佛教の一片でも感じられたらいいなあと思ひながら進んだ。大きな伽藍は建っている、人々を感じない寺、朽ちてしまった建物が昔を語ってくれるような寺もあった。

色彩やかに健在な様子の寺、灰色の法衣を纏った若い僧侶が忙しく働いている寺、観光化しているのか人の行き来が多い寺など一目見たぐらいでどうこう言うべきことの出来ないものだと感じた。

法事をしていた寺でお参りしていると「入って一緒に供養してほしい」といわれひと時、その中で静かな時間と、縁ある人達との輪に入った。あの人はどうしただろう。

楽しい旅がいくつも思い出されるが合うことも久しくなかった。どうしているだろう。冬、家族や従兄弟たちとランプをしたり、百人一首で坊主めぐりもした。正月には息子兄弟で正月料理を作るのを見ていたり、先祖への祈りがすむと、御馳

走を頂いたり、何の違和感もなく時を重ねてきたつもりだったのに、どうしてこうなってしまったのだろう。

入学式を迎えるため、二月の春休み中に行ったこともある。三月一日は「独立の日」で、韓国では大切な祝日だ。(日本のように無闇やたらに祝日はない)ある村で一人の少女が立ち上がって旗を掲げ、独立を民衆と共に喜び合ったのが切っ掛けとなったという日で、学校、公的関係も休み、次日には入学式、仕事始めとなるようだ。

大韓民国とそれぞれの市の旗が、沿道に掲げられる。V型の金具が備えつけられているから取り外しは簡単ようだ。

学校は歩いて行ける距離。制服はない。カバンはリュック式の物。体育館がないので校庭で入学式をした。風が埃を巻き上げ、話を閉ざしてしまふ。所変わっても子供の可愛さは変わらない。大人の不道德さも変わらない。携帯を鳴らして喋っていた。

あれから十年経った。少しは真摯になっただろうか。あの時の息子の喜びを思い出している今の私。沢山の思い出を作ってくれた。共有したこともあった筈だ。負担になっていったことも多かったのかな。どうして行ってしまったのか、心の奥まで分かかってあげられなかった力不足を思う私。言葉交わして心の通じ合えなかったことが原因になったのだろうか。

それを満たしてくれるのは、やっぱり肉親だったのだろうか。そこには息子を包んでくれる安らぎがあったのだろう。暖かく包んでくれるものを求めていったのだろう。希望にあふれて明るく進むこの時期に淋しさの中にいる私。

在り来たりの思いですが、

確り食べていますか
体を壊してはいませんか

淋しくはないですか

今でも他の息子や娘と何ら変わらない思いです。

昔んだ「伝統芸能の話」から

軍国主義復活と伝統芸能

木下明男

4 西田哲学のある変質と伝統芸能への新しい影響

西田哲学は三つの思想的な柱を持っていたように見える。

1 ヘーゲルの観念的弁証法(ドイツ哲学)

2 ベルグゾンの二元論的神秘主義(フランス哲学)

3 日本の禅宗(日本哲学)

西田哲学は精神の発展を、矛盾を基礎に考えている点では、弁証法的だが精神を一義的なものとし、物質をそれに映る影と見る点で、完全な観念論です。これはヘーゲルに代表されるドイツ観念哲学を殆どそのまま受け継いだもので「絶対理性」や「絶対弁証法」で神を認める点も全く同じ。

ベルグゾンの哲学は、物質と意識を分けて出発する点で、デカルトと同じく、二元論の形式をとっているが、意識を主にして物質を従にする点で、本質的には観念論の一元論です。意識と物質と言う二元を、「生命」と言う一元で、観念論的に統一している。宇宙全体が一つの神秘的な衝動に動かされて不断無限の「創造的進化」を遂げつつある「生命」(純粹神統)の躍進体と言っている。この生命の神秘感が西田哲学に大きな影響を与えてい

る。西田幾多郎がよく使った「絶対無」と言う言葉がヘーゲルの「絶対理性」と関係があるように、これも西田哲学の用語である「永遠の今」とか「歴史的物質」とか言う言葉は、物質は生命の固定した一つの形だとするベルグゾンの思想と関係がある。

西田哲学は、近代ヨーロッパの代表的な二つの哲学から大きな影響を受けてるが、同時に日本の禅宗からもっと大きな影響を受け、これを中心にヨーロッパ思想と日本思想(東洋思想)の統一を図ろうとした。例えば、「絶対無」は禅宗の「無」の思想と「絶対理性」(禅)を結び付けて、一層神秘的にしたもの、「永遠の今」は禅宗の「空観」と「創造的進化」を結び付けて、哲学的な形を整えたものです。西田幾多郎は実際に京都の妙心寺で「参禅」した人です。同時に、極めて重要なことは、西田哲学が日本の禅宗の伝統的な善政主義の歴史を振り返ってみる必要がある。

鎌倉幕府が成立して、政治権力が貴族から武士に移ると、宗教にも大きな変化が起こった。奈良時代から平安時代へかけて栄えた天台・真言の二宗が急に衰え、禅・日蓮・浄土の三宗が新しく進出してくる。特に禅宗は新興の武士階級の宗教として登場してきた。天台・真言の二宗が、貴族のための加持・祈祷を主にした極端な形式宗教に墮落していたのに反し、禅宗は新興の武士階級の清新さを反映し、生死の問題などの思想的な闇を精神修養で解決しようとする、真面目な態度を持っていた。道元(1003-1073)が永平寺を開いたとき、寺へ勅使が来たのを穢れたと言って、その座の下に土まで掘り起こして捨てたと言う話が伝わっているが、俗世間に対する軽蔑だけでなく、古い勢力を憎む、極端な潔癖も含まれていた。鎌倉幕府

は「京の五山」・「鎌倉の五山」を開いて、禅宗を擁護したが、禅僧たちも、武士の思想問題と真剣に取り組むと同時に、幕府の相談に乗って政治問題を理論的に処理する役割を進んで引き受けた。南北朝時代に、復古的で反動的だった南朝の勢力と戦っていた足利尊氏の政治顧問として重要な役割をした、天竜寺の礎石(夢想国師、1276〜1351)はその典型です。彼らは、進歩的な政権を助けて「善政」を行わせることが禅宗(仏教)の「衆生済度」の本来の任務で、人民に対する責任だと信じていた。その点、中国の禅宗の極端な反社会性(隱遁主義)と極めて対照的です。

日本の禅宗は、封建勢力の御用宗教の性格を持って出発し、鎌倉時代・室町時代・江戸時代と続いた。鎌倉時代から室町時代にかけて、日本封建制がまだ若く発展的で、指導者も進歩的要素を持っていた時代には、禅宗の「善政主義」も通用したが、戦国時代から江戸時代へ、封建性そのものが行き詰まり発展をやめ、人民に酷い圧迫を加えるようになって、同様にそういう権力を支持し、ひたすら此れに仕える態度を取ったので、「善政主義」は逆に「悪性主義」に代わってしまった。その代表的なものが、徳川家康の政治顧問で「黒衣の宰相」と呼ばれた金地院の崇伝(1569〜1633)です。

崇伝は、徳川幕府の殆ど全ての基本政策に参加しており、彼の作った様々の「法度制度」は、世界無比の厳しい身分層で人民を縛り上げ、社会発展の道を大きく塞いだ。マルクスも日本封建制を「典型的な封建制」と呼んでいる。「法度制度」の影響は、特に文化面に最も大きく、伝統芸能は今も殆どそのまま害毒を受けている。学問・宗教・芸術は、世界の歴史にも例のない、封建的世襲制

度を押し付けられた。宗教は、信者も宗教家も全て世襲で、家の宗教は孫子の末まで変える事が出来ず、信教の自由は全くなかった。宗教家は素質があるかどうかではなく、宗教家の家に生まれたかどうかによって、その資格が決まる。こんな不自然な制度の結果は、宗教は精神の問題とは全く関係がなくなり、葬式の道具になった。芸能も同じで、芸能人の素質があるかどうかではなく、芸能人の家を継いだかどうかで、生まれ乍らに芸能指導者の資格が決まる。今も全ての伝統芸能を支配している「家元制度」がそれです。それがどれだけ日本の文化・芸術の真面目な発展を妨げてきたでしょう。すべて、禅宗の奇妙な「善政主義」(実は極端な「悪性主義」)に基づきます。更に、禅宗は封建制度の確立に、次のような役割をしている。江戸時代の中頃から「武士道」という極反動の道徳が現れたが、その基礎となったのは所謂佐賀の『はがくれ』で、『はがくれ』は佐賀藩士・山本常朝(1659〜1719)の口述を田代陣基が書き取った佐賀藩の記録で「武士道」という死ぬことと見つけた」と言う有名な言葉で始まっている。主君のために命を捨てる忠義と言う道徳と人間の命を「無」と見る禅宗の思想を結び付けたものだが、武士のいなくなった明治以後の資本主の著書で、外国にまで宣伝され、「忠君愛国」・「一死報国」などの日本ファシズムの思想的基礎を作った。

西田哲学一派は、戦前、禅宗の観念哲学を受け継ぐと同時に、その伝統的な御用宗教の要素まで受け継いで、軍国主義勢力と結びつき、反動的・反人民的な行動を続けてきましたが、1945年の敗戦とともに、西田哲学にもある変質が起こり、新しい害毒を社会に与える事になった。何十年もの間、極端な国粹主義を振り翳してアジア諸民族

を侵略した。日本の反動勢力は、敗戦とともに、がらりと変わって、昨日まで「鬼畜米英」と言っていたアメリカ帝国主義に縋り、その力を借りて日本人民に対する支配を続けようとした。その結果、日本は「アメリカ帝国主義とそれに従属的に同盟している日本の独占資本」この二つから基本的に支配されることとなり「アメリカ帝国主義に半ば占領された事実上の従属国」となった。それまで極端な国粹主義者だった日本の支配勢力は、極端な売国主義者にならった。この場合重要な事は、これら日本の反動勢力は、国粹主義を捨てて売国主義にならったのでなく、極端な国粹主義者のまま、極端な売国主義者にならった事です。その売国主義の重要な基礎は、絶対的天皇制の伝統的な外国崇拜からきている。「サンフランシスコ条約」と「日米安全保障条約」を結んで日本をアメリカに売り渡した張本人は吉田茂(当時の首相ですが、彼は「臣茂」と言って天皇に限りない忠誠を誓う、極端な国粹主義者の態度を死ぬまで続けた。その天皇は「アメリカ帝国主義と日本独占資本の政治的・思想的支配と軍国主義復活の道具」になっています。

19世紀の初めに、コーカサスのグルジアが帝政ロシアに併呑されたとき、それまで極端な国粹主義者だったグルジアの支配層が極端な売国主義者にならったのが歴史上の笑いものになっているが、戦後の日本にも同じ事が起きている。ただ、今の日本の場合、反共主義で矛盾を統一しようとしている点に、重要な歴史的特徴がある。西田哲学一派は、戦後の日本の新しい支配体制を、その伝統的な御用宗教の態度で、そのまま受け取り、忠実に仕えて軍国主義復活のために全力を挙げている。前から反動的・反人民的だった西田哲学一派

は、新しく売国主義の要素を持ち、反民族的要素を備えた。西田哲学一派のこうした変質から、伝統芸能を妨げる様々の新しい害毒が生まれた。米・日反動は、日本人の間に独立・平和・民主・生活向上のための民族民主統一戦線の発展するのを最も恐れ、勤労人民の民族的自覚と階級的自覚の高まるのを何よりも恐れている。明治以来、極端な国粹主義と極端な外国崇拜の二つの面を持った天皇制文化が、日本人の自覚を抑えて軍国主義に向かわせるのに、どんなに役に立ったか良く知っている。一方では、国粹主義の基礎の封建的要素が大きく弱まったのを保存し、一方では大きく広がった外国崇拜の道から、退廃的な植民地主義文化を流し込み、両方で日本人の自覚を眠り込ませ、再び軍国主義に向かわせようとしている。その方針に従って、最も忠実に活動しているものに西田哲学一派があり「建国記念の日」と「期待される人間像」はその集中的現れです。

軍国主義復活のために、伝統芸能を利用し墮落させつつある、米・日反動の政策に反対し、徹底的に戦う事なしに、伝統芸能を正しく発展させる事は出来ない。そこで、伝統芸能のどういう作品を、どう取り上げ、どう処理して、勤労者の間へ持ち込むかが中心の問題になる。伝統芸能は、封建社会で育ち、封建的な義理・人情その他の害毒を大きく残している作品が多いのを、米・日反動は、そのまま保存しようとする努力し、更に植民地主義の退廃的な毒素を注込んで、底の底まで墮落させようとしている。だからこそ、労働者階級の立場で正しく処理された伝統芸能の作品は、これまで誰も引出得なかった新しい魅力を其処から引き出し、嘗てない新鮮さで勤労人民に深い感動を与え、反動的で退廃的な作品と比べられて、圧倒的

な支持を得られる条件を持っている。そういう感動を通じて勤労人民の民族的自覚と階級的自覚を大きく高められる要素を底深く持っている点が伝統芸能の本質で、それを出来るだけ大きく發揮させる事が伝統芸能の正しい発展であり、全ての民族文化の正しい発展の基礎となります。うたごえ・労音・わらび座・民族芸能を守る会・ふきの会、その他の民主的な団体の活動の経験は此の事を具体的に証明している。だからこそ、米・日反動は、伝統芸能の正しい発展を最も恐れ、様々な圧迫を加えている。「我々は、外国の進歩的・革命的な文化を引き続き自主的に学ぶと同時に、我が国の一部の知識層の間に強い外国崇拜や事大主義の傾向に反対し、日本文化の中の伝統ある遺産を正しく受け継ぎ、革命的・民主主義的文学、芸術の創造を含む、新しい人民的な文化の建設に努力しなければならぬ」

(つづく)

志筑城址と志筑藩

小林幸枝

今まで志筑城跡の看板がなかったのですが、仕事の帰りに新しくつくられたのか、看板を目にした。それでちよつと寄ってみました。

志筑城は、鎌倉時代、源頼朝の家臣下河辺正義(後尊子氏)が、義和元年(1181)源頼朝に叛いた浮島の信太義広を討ち、その功により茨城南部の地頭となり、この地に城を築いたのに始まります。

この城跡は、三方が深田に囲まれ、南側に自然の掘割を擁した天然の要塞で、土塁など鎌倉時代の築城方式を今に残しています。

南北朝時代、五代の頼助、国行父子は、小田城主治久と共に南朝方に属し、北朝方の石岡の大掾高朝としばしば戦を挑み、半年間も戦闘を続けたが興国二年(1341)十一月小田城の報せを聞き、翌日六代国行は城を捨てて一族の小山氏のもとへ走り、その後も南朝方のために忠勤をはげんだという。

その後、廃城となっていたが、慶長七年(1603)佐竹氏の国替えに伴い、出羽国より当地へ移封となった本堂茂親が志筑藩の領主となって、正保二年(2645)ここに陣屋を構えて廃藩置県まで本堂氏十二代の居城となっていた。

(かすみがうら市教育委員会)

志筑城跡内には、志筑小学校がありました。2011年9月1日に志筑の街の通りの反対側の丘の上に移転しました。その後、この城跡の校舎や学校の看板は取り壊され、現在は門柱だけが残る空き地となっています。

昔の城の堀跡を思わせる池がありました。春は桜が咲いて、夏は深緑、秋は紅葉が見られます。とてもきれいな場所です。通路側には昔の面影を伝える長い堀が残っています。立派な屋敷塀と門があり、志筑藩の陣屋に使われていた玄関部分を移築して造られたそうです。また茅葺屋根も保存されていました。

近くには、木像十一面観音像と五百羅漢で有名な長興寺があります。

志筑の街は、立派な塀や門を持った屋敷が立ち並び昔の佇まいを残した静かなところで、改めて感心して帰ってきました。

【風の談話室】

《特別寄稿》

命の河を遡り

田島早苗

(十三) 人生の締めくくり

早紀は退職後六十歳から、出不精だった自分を鼓舞し、出来る限り地域の人々と関わりを持つようになり素晴らしい出会いにも恵まれた。

俳句、俚謡、陶芸、その他公民館主催の講座やボランティア等々、自分の殻に閉じこもって居たら知る事も無かった別の人生を味わうことが出来、若い人の言葉に耳を傾けながら、目から鱗が落ちる想いをする事も多かった。

”井の中の蛙大海知らず”とは正に自分の事だと思いつたのもあの頃だった。

多くの人達の助けが有ったからこそ続けられた好き勝手の学びの中で、「人は一人では生きられない」としみじみ思うのだった。然し無器用な早紀は、心の中に溢れる想いを口にすることもなく、先方から手を差し伸べて下さる人を除けば、一期一会の出会いと別れになることが多かった。言葉に出さねば気持ちには伝わらないのだと思いながら、その先へ進めない弱虫の早紀だった。

子供の頃から目一杯背伸びして生きてきたが、早紀の実態は甘ったれの意気地なしだった。

人の痛みは分らないと言われるが、本当に判っていないのは自分のことかもしれない。

何事にも真摯に向き合い、子供達にも一杯愛情を注ぎ育ててきたつもりなのに「小さいころお母さんに箒をもって追いかけられた」という次女の言葉に啞然としている早紀。

育児書を読みまくって、甘やかしたら意気地無い子に育つと固く信じ、育児に関わらない夫に代り、小言を言うのも、叱るのも全部早紀の役目だったあの頃、自立できる子に育てるのが親の役目だと一途に思い込み、真面目一本やりでゆとりが無く、すべて子供の為と言いながら、自分勝手な理想を子供達に押し付けていた至らぬ母だった。

『タイムスリップして、もう一度育児をやり直せるものならば、おおらかな愛情で包み込み、何時も笑いの絶えない理想の家庭を築いて見せるのに』と思っても、過ぎた人生はやり直しが出来ないから怖い。

早紀は編み物が大好きだ。無心に編み棒を動かしている、雑念はすべて消え失せ心が解放される。複雑な模様編みに挑戦する時、少し油断をすると編み目を間違えてしまう。「しまった！」と思うより早く、苦勞して編んだのを惜しげも無く解き始める。消すことが出来ない過去と違い、何度でもやり直しが出来る編み物の醍醐味はここにありと、いそいそと糸を解き進む。若しかして早紀は編むよりも解くのが好きなのかもしれない。更に解いた糸が纏れた時にこそ早紀の本領が発揮される。「この世で出来たことは必ず解きほぐすことが出来る」とばかりに諦めず執拗に纏れに挑戦する。まるで人生の悩みを解く様に…。

「育児は理想通りに行かない。後悔する事ばかり…」何かの折にふと漏らした言葉に「子育てを後悔されて、後悔の産物である子供はどうなるのよ」と返ってきた長女の言葉、あれは娘が教師になったばかりの頃だったかもしれない。

早紀が試行錯誤の中で一生懸命育てた子供三人は、不出来な母親を反面教師として、子供を叱らないで上手に育て、五人の孫たちは皆優しく育ち、それぞれの道をしっかりと歩き出している。

しかし自分の欠点も、美点(?)も引きずっている子供達を見ていると、遺伝子だけはどうしてもない気がする早紀だった。

母の胎内で人類の進化そのままの経緯を辿り、十カ月と十日の月満ちて人として誕生する小さな命。人生の壮大なドラマは、生まれる前から始まっているのだった。そして死後は? 魂は彷徨っているのか、命の連鎖は? 等と理解できない事はさて置き、人生の幕引きをどの様な姿で迎えられるのか、どのような準備をすれば等々、いまだに何の覚悟も出来ない凡人の早紀だった。

隣の娘の家に同居して二年余り、引越先で友達も出来ない早紀は、相変わらず古巣へ戻る動物の様に昔の仲間との関わりを持ち続けていた。(有難いことに、足の無い早紀は、友達の送り迎えを受けることが多かった)

古巣の村のボランティア仲間が毎年二月に行っている福祉バザーは、チラシ配りから始まる。そして本番の、準備を入れた三日間の活動は、楽しいふれあいの場でもあった。

会場は皆さんの善意溢れる品で埋め尽くされている。家庭で眠っていた新品や、まだまだ使えるような日用品、古着類が山と積まれ、百円、二百円、三百円に分類される。最高でも五百円止まりなのだ。そこに広がっているのは、ロケットが飛び交い、ロボットが人力にとって代わろうという時代とは全く別の世界だった。

そのような古着の山から掘り出し物を見付ける楽しみはまた格別で、バザーに一杯出品した仲間たちは、今度は会場を探し回って、お気に入りを見つけては、宝物を掘り出したような顔をして買い求めるのだった。でも、その品物は再び来年

のバザーに戻ってくるのが多かった。

会場で顔を合わせた友達と楽しく語らうことが出来るお茶飲みコーナーも用意、仲間の友達が筑波からも訪れ、大盛況だった。

早紀は体力に自信が無かったが、参加したおかげで、久しぶりの知人と会話が弾み、日頃会話に飢えていた自分を再認識するのだった。

仲間が持ち寄った食事やデザートで賑やかに始まる二交代の昼食。そこで交わされる情報に耳を傾けているだけで楽しく、疲れも感じなかった。限りある地球の資源を使い捨てにしている付けはきつと子孫に返って来ると思う昭和一桁生まれの早紀は、バザーを楽しみながら、こんなにも細やかな取り組みが、皆の心に小さな灯をともし呼び水になるよう祈らずにはいられなかった。

「ご主人の事残念でしたね、貴女の出版祝賀会の時のご主人の優しい笑顔が忘れられません」バザー会場で友の優しい言葉を頂いたとき、「私にも光輝いた瞬間があったのだ」と、改めて振り返ることが出来た早紀だった。

日記などは三日坊主で腰砕けに終わる早紀が、全国に展開している俳誌にエッセイを百回連載、八年と四力月の長丁場を一回も休まず乗り切ったのは奇跡に近いことだった。「楽しみに読んでます」という励ましの言葉を支えに、挫けそうになる心を奮い立たせながら、我が家のアッシー君を便利に使い廻していた早紀。何時も嫌な顔を見せず何処へでも連れて行ってくれた夫に改めて感謝！

拙いエッセイを、一冊に纏めたいと恐る恐るお伺いを立てた時、「思い通りにしたら」と返ってきた夫の態度に、少々拍子抜けしたことも懐かしい思い出だった。

五人の友達が発起人になり、二の足を踏んでい

る早紀を置いてきぼりに、出版祝賀会を行うことになってしまったのだった。最初はためらっていた早紀だったが、幕を開けてみれば、晴れがましい主役の座に持ち上げられ、すっかり舞い上がっていた。夫も実に楽しそうに歓談したり写真を撮ったり、まるで自分の事のように喜んでいて。やはり私は愛されていた？

『霞ヶ浦のほとり』というタイトルに見合ったという事で選ばれた会場の、国民宿舎水郷は、約三か月後の大震災で大きなダメージを受け修復不能となり取り壊される運命が待っていたのだ。国民宿舎水郷も、早紀と同じように、あの日が終の輝きだったのかもしれない。

闘争は動物の本能だから、この世から戦を失くすことは難しいかもしれない。日本でも歴史を紐解けばすべて闘いの記録ばかり。でも弓矢や刀が武器だったころは、無差別に女や子供の命まで奪うことは少なかった。然し銃や化学兵器が発達した現在、それを手に入れた人は、まるで危険な玩具をもてあそぶ子供の様に、怖いもの知らずの暴挙を繰り返す。戦争の足音が聞こえて来る予感に怯える世界。

戦争の惨さ怖さを実感出来ない人達にその実態を教えるのは昭和一桁生まれの責務と思う早紀だったが、現在の平穩に胡坐をかくばかりで、何一つ行動を起こさない自堕落さ。

平昌五輪での熱戦に一喜一憂している昨今、障害を乗り越え、自分に打ち勝ち、想像を絶する努力を重ねた末に栄光を掴んだアスリート達の話に涙しながら、自分の不甲斐無さに気付く度、何時も肝心の時、読書や編み物に逃げ込んでいる弱虫の自分が見えて来る。

世の中の不公平ばかり並べたて、斜に構えて転

落の一途をたどる若者たちへ「人生は一度きりのよ」と声を大にして叫びたいと思いながら、その時、踏み違えた迷い径を正してくれる人との出会いが有ったならば君の人生も変わっていた筈と残念がるばかり、一度踏み込んだ迷い径を抜け出す苦しみに耐えて立ち直って欲しいと只願うだけの無力な早紀だった。

人間は誰かの役に立っていると思うだけで生きる力が湧いてくる動物らしい。娘と同居した早紀も、洗濯と食事の支度は自分の仕事と思い、出来る範囲で頑張っているが、何時までも居候感覚が抜けず、食材のどれを使っているのか迷うことが多かった。『老いては子に従え』昔の人の教えが、身に沁みる。

好奇心だけは衰えない早紀は耳が遠くなつたのを幸いに、出来るだけ口出ししないのを習わしとして、すべてを娘に依存、波風の立たない暮らしが成り立っている。

娘が図書館で借りて来てくれる本は、早紀の今まで読んだことのない系列が多く、お蔭でファンタジーに嵌った早紀はどっぷりと虚構の世界に遊ぶことが出来るようになった。

不公平なことが多い世の中で歳月だけは平等に誰の上にも影を落とす。余命がどれほどなのか分からないけれど、せめて惜しまれる内に旅立ちたいと願っている。

早紀と同一年の天皇陛下の退位と、皇太子の天皇即位の礼が来年に迫り、年号が変わる。象徴としての天皇陛下の日常は窺い知ることが出来ないが気を緩めることが出来ない佇まいだと思う。人並みの安らぎが、晩年の陛下に訪れます様にと願わずにいられない。早紀のお節介はまだまだ健在のようだ。

(了)

独りよがりの文章を書きなぐった一年余り、お付き合いくださった皆様には只々感謝あるのみ。

当初は物語風に書き進めて、自分を丸裸にするつもりで遡り始めた命の河だったが、現在生きている自分以外の人を、裸にすることも出来ず、唯筋書きを追うだけの中途半端な内容になってしまい、自分の非才に挫けそうになるばかり。

然し自分を見つめ直し、案外悪く無い人生だったと実感できたのは、望外の幸せだった。

ありがとうございます。

十三回にわたって連載いただきました田島早苗さんの「命の河を遡り」が、今回で終了しました。ありがとうございます。引き続き、日々の風に吹かれながらのエッセイなどを投稿いただけます事を願っております。

《読者投稿》

やささと暮らし (13)

さと女

ひととき寒い今年の冬、まいとし自然に齢を重ねるが、気持ちだけは若くありたい。

・夫の事

夫は毎朝、日の出前の薄暗いうちに散歩に出かけます。あまりにも寒いので、息子がプロレスの会社に勤めていたころ着ていた、オレンジ色の派手なコート姿で部落をひと回りするので、目立つことこの上なしです。余りの派手さに、車も避けてくれるでしょう。ご近所さんも今朝は早かったとか遅かったとか話題に…。

すっかり葉を落としたけやきの大木、小鳥たち

の楽園になっている。モズ、ヒヨドリ、ヤマガラ、ムクドリ、お腹の茶色なのはジョウビタキ？かな、飛び去ったり戻って来たり一日中賑やかな事…我が家の方の楽園は何時になったら…。5年前剪定してもらった銀杏の木が大きくなり、のこぎりでシコシコと俄か庭師となりました。やつの事で真ん中の芯を切ったが、計算違いでハウスの上にバツサリ倒れてしまった。それからが大変。シコシコと枝を切り、切っては下ろしの繰り返し、そのうえ一番太い幹が、枝に挟まってしまふ、ハラハラドキドキの1日だった。

前日に続いて此の日も。今度は電動のこぎりの音が響く。見ているだけで怖くハラハラだが中途半端にぶら下がっている丸太をそのままにして置けず、半分に切って地面に落とした。一件落着だが今度は枝の始末、途中来客などもあり、作業は延々と続き、何時までも終わらない。ギンナンはとても美味しいのだが、こんなにも大きくなるとは、ねえ。

・雪景色

楽市さんよりお昼のお誘いがあり、車を走らせていると白いものがふわりと、予想が当たった。ログ2階で食事を始めると見る間に辺りの景色が変わる。ログは改修中で3方大きな窓が入り、周りの景色が一望できる。山も田んぼも真っ白、雪景色もご馳走にして会話も弾む。

家に帰ると防災無線から彼方此方通行止めの放送が流れていた。一面真っ白、雪質はさらさらで雪だるまを創ろうにも握れない、コロちゃんはサラサラの雪の上をご機嫌に走りまわっている。散歩中会った知人が昨日はすぐその農免道路で10台程の玉突き事故があつたよと教えてくれた。

いつも通る道なので気をつけねば。

翌日、朝起きると一面の雪、先日降った雪がまだ溶けてない。空は真っ青、空気はキンキンに冷えている。どうしても出かけなければならぬ用事があり、恐る恐る車を走らせた。旧有明中学校から大田の方へ向かう道中、急に目の前が開けて雪をかぶった山々が一望。いつもと違う景色に見とれてしまった。

数日後また、目覚めると外は真っ白。節分が終わると、雛巡りの便り。雪の下にはフキノトウが、季節はいやおうなしに過ぎて行きます。朝、赤々とした炭火を見ると、一日のおかずが頭に浮かぶ。朝のうちに夕のおかずを一品でも作っておくと、何故か安心する。出かけて遅くなるうが焦らないで済む。昨日は大豆をコトコト煮て、大根と鶏手羽を煮た。

・ならせ餅

お隣さんから丸餅が届く、明日小正月なので「ならせ餅」を突いたからと。そうか今日は1月14日、親が元気な時は季節の行事を大事にしていたなと改めて思った。お隣には土間があり、柳などの木の枝に刺した紅白の「ならせ餅」がよく似合う。最近では部落の中でも、ならせ餅を作る家も少なくなってきた。

用事がありお隣さんを覗くと凄惨。お餅の花がたくさん。行事が終わった後のお餅が、みんなの楽しみ。この時期のお餅はかびないので、細かく砕いて天日干しをして保存食にするという。集まり事があった時とか、油で揚げて生醤油をかけて食べる。何とも美味しいかき餅です、今年も無病息災、五穀豊穡を願って。

・友人と房総へ

楽市さんご夫婦のお誘いで千葉県勝浦へ、社長が彼方此方案内してくれた。大多喜城見学、道の駅保田小学校、その後勝浦で一泊。ホテルに着いた時は見事な夕焼けで感嘆の声を。翌日は海中公園で沢山のお魚や海岸の景勝地を楽しんだ後買い物を楽しみだった昼食は銚子丸での寿司三昧。あつというまに1泊2日の旅が終わりました。早速2泊お願いしたコロちゃんのお迎え、元気で良かった。

・カフェオリーブ

今年初のランチコンサート。彼方此方で新年の挨拶が、顔馴染の皆さん元気で良かった。毎月、顔を合わせている人たち、顔を見ないと気になる。それぞれのランチを食べながら贅沢に生演奏を聴く。ママもランチにコーヒ、デザートとお腹を満足させてくれる。窓の外の雑木林にはウグイスさんや千鳥さんのような小鳥が飛び交っている。又、来月まで元気でね、とそれぞれ別れた。

・不思議な空間で着物デビュー

日本を代表するジャズシンガー中本マリ(同世代)のライブが不思議な八角形のお家(H邸)で。満員のお客はマリさんの歌に酔いしれた。休憩時間には主催者Hさんの心のこもったディナー(数日前から煮込んだビーフシチューなど全部手作り)を頂いた。第二部はワインなど飲まれた方もいて、いっそう和やかな雰囲気、最後はブラボー、アンコールの声が響いた。ある人が、茨城弁で「おしやらぐな」コンサートなどと。

八郷には着物の文化を大切にしている方が何人もいます。いつもその方達の着物姿を見ては憧れて

いた。時間的にも気持ちの上でも余裕が出来た今、着て見ようかなという気持ちが湧いてきた。今回、中本マリさんのライブに、着物でお邪魔しました。着物を着ながら、母は毎年長谷川きよしさんのコンサートを楽しみにして、その日は必ず着物を着て出かけたのを思い出した。

ちゃんちゃんこ。母が縫ったものだと思うが、押入れに入っていたのを思い出した。着てみると、袖がないので作業がしやすい。肩が凝らない。よく見ると、1枚は真綿が薄く入っている。もう1枚も真綿が入っていてリバーシブル、もう1枚は普通の綿の物だった。今年になって連日の寒さに大活躍、90歳を過ぎて少し認知の出できた母とタカカタ日々など思い出された。FBに載せた写真に裏も見せてとのコメントが、改めて裏を反して見るとピンク色の何とも綺麗な着物地、御所車に牡丹の花や梅の花、飾っておきたいようでした。

・東筑波ユートピア

先週のテレビ番組、志村動物園にて日本一お客の来ない動物園と番組で紹介されていた。久しぶりに小川園長を訪ねて行くと、夕方だったにもかかわらず何と駐車場には車が何台も。賑やかな笑い声も、お猿さんのショーを見てきた人たちは、楽しかったと口々に、猫カフェには若いカップルが何人も、テレビを見てから2度目というカップルは両手に沢山の荷物をもって、犬小屋に、寒波が又来るから犬がかわいそうだ、10数匹いる犬小屋の掃除をしながら、毛布などを敷いていた。今月も続いてテレビ放映があるとか、大勢のお客様が続いて来てくれるといいですね。

・しし鍋

大雪で延期になっていた新年会、ほうろくやでしし鍋を囲む・・・イノシシは3・11大震災後放射能の値が高く未だに厳しい値らしい。石岡では検査出来る所一か所、其の後県の検査も受けなければ食料には出来ないらしい。肉の値段は牛肉より高いと語っていた。あの、恐ろしい事故から8年目に入るのにいまだに、何の解決にも至っていない。そんな、こんな話をしながら、しし鍋を食べた。味噌味が美味しかった。帰りは雪がちらちら、また、強烈な寒波が来るらしい。

・初体験

朝日里山で開催のそば祭りに出かけた、時間が早かったので、知人経営のイチゴ直売所に寄った。中では挽ぎ立てイチゴの甘い香りがして、パック詰め、それを受け取りセロハンや銘柄のシールを貼り箱に入れる。旦那さんはいちご狩りの方へ行ってしまう。手伝いを当てにしていた方は地域の集まり(安講)で来られず、いい時来てくれたと大歓迎してくれた。結局そば祭りには行けなかったがイチゴを食べながらのお手伝い、大変楽しかった。

・誕生日

フラワーパークの向かいに木工作家さん(利八工)のギャラリーがある。そのギャラリーで、手作り人形まつりが開催されていると聞いた。八郷在住の人形作家矢部藤子さんの指導を受けた、やさ

と人形同好会の皆さん方（葦穂公民館で行っている体操の隣で人形作り）からのお誘いで、早速見に行った。どれも見事な創作人形、語りかけて来る様な可愛い人形たちだった。

その時、入り口際に飾ってあった、木彫りのフクロウさんに出会った。かわいいなあ。日頃から頑張っている自分へのプレゼントに購入した。そして、農協さんからも、美味しい？どら焼きのプレゼントが届いた。夜はキムチパーティーを。こうして区切りの誕生日は無事に過ぎて行った、お祝いのメッセージを寄せて下さった皆様有難うございました。何とか元気で頑張れそうです！

《風の呟き》

「四〇」の疑問

打田昇三

主要な空港などには「検疫所」が設けられており其処の看板と言うか表示には「QUARANTIN」とある。此の言葉はラテン系言語（フランス語、イタリア語など）で「四〇」を意味すると聞いたが、なぜ四〇なのか不思議でならなかった。

未だ航空機が無かった時代には輸送の主役が船舶であり、航海から戻った船は港の外で四〇日間の待機を義務付けられていたと言う。それが語源らしく、四〇日を過ぎれば疫病の発生も分かるので健康な船員の上陸が許される。単純で原始的だが防疫に有効な其の方法を初めて実行したのが、日本の平安時代初期に当る八世紀頃から繁栄した海洋都市国家ドブロブニクである。

現在、其の地はアドリア海沿岸の国「クロアチア」領に城壁で囲まれた都市遺跡として残されており、欧州大陸から陸路を行くとクロアチア領が

途中で少し途切れているために、紛争が絶えなかった「ボスニア、ヘルツェゴビナ」の沿岸部を通過させて貰うのでスリルが味わえる。

ドブロブニクは背後に山が在る。内戦時代には空では無く山の上から人力で放り投げた爆弾が降り注ぎ城塞都市は壊滅的な被害を受けた。現在は完全に中世の形に復元され世界遺産に指定されているから旅行者必見の場所なのだが、かのナポレオンは此処を占領して修道院などを「厩（うまや）」にしたらしいから罰当たりな人物である。

歴史的なことに共に、此の地を有名にしたのが「ヌーデイストビーチ」である。裸になれば誰でも行けるので、世界各地から大勢の物好きが集まって来る。興味のあるお方は、どうぞ！其の場合には年齢が「四〇」でも「五〇」でも関係ない。

脳化指数がすべてではない

菅原茂美

今月号の随筆で、動物の脳重と体重との比から、動物の知能を比較するための生物学用語「脳化指数」を取り上げた。しかしその指数の大小は、ストレートに知能を表すものではない。なぜならば、ウマの知能は犬やカラスより下で、モグラより、ちよつと上などとは到底思えない。証拠を示して反論したい。

馬や鹿を人はバカと侮るけど、とんでもない。実話であるが、戦時中、岩手県馬産農家が、愛馬を軍用に徴用された。馬はどこへ配属されたか勿論知る由もなし。しばらくして、その農家の青年も赤紙一枚で満州に入隊。馬に慣れているという事で、青年新兵は馬の飼育係を担当させられた。するとある一頭の馬が馴れ馴れしく飼育係に近づ

き、鼻をこすりつけてくる。不思議に思い馬籍を調べてみたら、なんと岩手で自分が飼っていた馬であつたという。人間は忘れていても、馬は何年も経っているのに、しっかりと記憶しており、親愛の情を示している。

又、私自身の経験であるが、故郷岩手で中2の冬、雪で固まった道を馬で走っていたら、足を取られて転び、10メートル位滑った後、馬は道路の右側の田んぼに、私は左側の田んぼに投げ出された。私は多分、脳震盪で意識を失い、雪の中で倒れたまま。すると愛馬は先に立ち上がり、道路を超えて私の所まで降りてきて、動かない私を鼻で突つつく。お陰で私も意識を回復し、再び愛馬の背にまたがり、無事家に帰った経験がある。50cmほどの雪は素晴らしいクッション。人馬共にかすり傷一つなし。もし愛馬が私の事を無視し、自分だけ家に帰ったなら、恐らく私はそのまま凍死していたに違いない。こんな例を見るとEQ指数など全く関係ない。車で轢き逃げをする人間もいるのだから、馬より、はるかに愚かな人間は、いくらでもいるという事。

*

【馬・余話】馬はなぜ走るか？ それは馬が毎日食べる草に、ある種の必須アミノ酸が不足し、それを満たすためには、余計な草を沢山食べざるを得ず、蛋白質や炭水化物が過剰となり、脂肪として蓄積する事になる。それを運動により消費しなければ体調を維持できない。ネズミやウサギも同じで、1日約10km走らないと生理的バランスを維持できない。北米で進化した馬が、北米で絶滅し、ベーリング海峡を渡りアジアで生き残ったのは、北米の草に比べ、アジアの草が馬に適切であったからである。

＊

北島三郎のキタサンブラックは、引退をかけた最終レースの17年「有馬記念」。武豊騎乗1番人氣で、先行逃げ切り見事一着ゴール。

さてこの馬は、良血馬でもなく、それほど体格でもなし。セリで買い手がつかないが北島は心に残り、後でヤナガワ牧場から庭先購入。それが調教師（清水久詞厩舎）の腕により、史上最大の賞金王（ディープインパクトを超え18億7684万円）になった。戦績は20戦12勝、G1を通算7勝。栗東トレセンには1085^日で32^日の坂を上る坂路コースがあり、普通の馬は1日1回だが、なんとキタサンブラックは3回も走る強烈な心肺機能を持っているという。そして、普通、馬は疲れると立ったまま眠るが、なんとキタサンブラックは、ごろりと横になり、いびきをかいて堂々と深く眠るといふ。人間にも、そういう豪傑が偶にいるが、小さな事にクヨクヨしない、大器晩成型の人物は、真に魅力的だ。

見直せばそれは玉手箱

白井啓治

時々思い浮かんだ言葉や思いを書き込んでおく創作メモというノートを何時も持ち歩いている。二十歳過ぎからだから、もう五十年以上になる。思いついた言葉の断片だけをメモしておくだけのものだから、文章そのものには独立した主張があるわけではない。

創作メモノートは、年に数冊作ることもあれば数年に一冊の事もある。最近では数年だったり五年に一度だったりする。

先日、五年ぶりにノートを新しくした。最近では、

PCに創作メモを打ち込んでいたので、ノートに書き込むことが殆どない。床に入って睡眠剤代わりの本を読んでいるときに、ふと思いつきメモするしかページが埋まっていけない。それも思い付きの断片に言葉だから、数行も書かないことが多い。

新しいノートを作りながら、終わりになったノートをめくってみた。最初のページにこんなことがメモられていた。

『言葉は説明や解説をするための道具ではない。揺らぐ心を歌うリズムとメロディーなのだ。言葉に説明を与えて詩を詠うな。』

揺れるリズムを紡げ。
揺れるメロディーを紡げ。』

ここ十数年のノートのメモの大半が、ことば座で小林幸枝が舞うための台本用のメモである。

『時を使うことを惜しんではいけない。』

時を使えば、使っただけまた帰って来る。

風が時を持って来てくれる。

時は風と同じ。

行く風と来る時がある。

時は惜しまずどんどん使おう。

時は命ある限りやって来る。』

こんな思い付きの言葉のメモが、常世の国の恋物語百となっていくのである。だがこれらのメモの大半、いやそれ以上がノートのシミとなつて終わっていくのだから、時とことばの無駄遣い、と言えなくもない。

しかし、インクの染みだらけになったノートを読み返してみると、ただの捨て石になった言葉の何て沢山あることかと聊か感傷的になる。しかし、このノートは玉手箱であることは確かである。

【特別企画】

打田升三の私本・平家物語

巻第七・（三・二）

青山之沙汰（せいさんのさた）のこと

幕末の攘夷派僧侶・月照の遺稿に「人間到る所青山有り」と書かれているそうで此の言葉が有名なが、ここで言う「青山」は人間の意志では無く前の章段で都を落ちる平経正が覚性法親王に届けた琵琶の名器に付けられた名称である。

平経正は十七歳のときに奉弊の勅使として宇佐八幡宮に派遣されたことがある。その際に（朝廷から「青山」を貰って行って（荷物にはなるが）宇佐八幡宮の神殿に向かい演奏会した。勿論、琵琶の名手として知られていたのであろう。その場に集まった勅使の従者やら神宮の関係者は、その演奏に感動した。「びわ」と言えば果物しか知らない者たちも義務として感動をしたのである。一般には八幡宮と言えば源氏に信仰されたように思われているが宇佐八幡宮は豊前国一之宮であり朝廷との関係が深く、京都を放棄した平家は、寿永二年九月に天皇を奉じて宮司の館に入っている。

青山と言う琵琶は仁明天皇時代の嘉祥三年（八五〇）春に掃部頭（かもんのかみ）本来は天皇などの墓所を護る役所の長であるが、転じて宮中の式典・儀式の管理などを担当する掃部寮の長官 藤原貞敏が遣唐使に従って唐に渡った際に持ち帰ったものである。唐の琵琶博士である廉承武（れんしょうぶ）に会い、三つの秘曲を伝授されて、それぞれの曲に合う琵琶（玄象・獅子丸・青山）を貰った。船で日本へ戻る途中に嵐に遭い、その時に獅子丸を流されてしまった。原本に「龍神や惜しみ給ひけん。波風荒らく立ちければ、獅子丸

をば海底に沈め…」と書いてあるが、龍神に責任は無い。残る玄象と青山だけが日本に伝わった。

本物の琵琶であり、唐伝来の名器であるから天皇家でも宝としていて村上天皇の時代、應和年間（九六一〜九六三）の十五夜に月が白く冴え涼しい風が吹く中で天皇が玄象を弾じていると、何処から現れたのか影のようなものが天皇の御前に座し幽霊にしては優雅で上手に、曲に合わせて唄を歌った。さすがに天皇も怪しんで「其の方は誰で何処から来た歌手であるか？」と訊ねられた。

その声が良い怪物は「その昔、藤原貞敏に三曲（琵琶三弦）を伝えた唐の琵琶博士・廉承武は私です。秘曲・三曲のうち、一曲（それに合う琵琶）は日本に伝わらなかったのが心残りで、其の為に悪魔の世界に沈んでいました。今、此処で上手に弾ずる琵琶の音を聴き冥界から飛んできました。どうか、私が抱えている獅子丸に合う曲を聞いて下さい。それを貴方に伝えられれば私も成仏することが出来ます…」と言って、天皇の傍に在った名器「青山」を取り、転手（てんしゅ＝調節の為のハンドル）を回してから秘曲を模範演奏した。

村上天皇は本来、伝わる筈であった「上玄・石上」と言う曲を幽霊に教えて貰ったことになるが、気味が悪いので其の曲を弾くことは無く、問題の琵琶・青山は御室（仁和寺）に置かれていた。それを、平経正が少年時代に童子として奉公していた時代に貰っていたのである。

此の琵琶は弦を巻く琵琶の頭部が「紫藤の甲（しとうのこう＝大きい紫の花を付ける木で作られたもの）」であり、撥面（ばちめん＝琵琶の表面）に革張りで「夏山の峰の緑の木の間から有明の月が出る」絵が描かれていることから「青山」と名付けられたのである。先に述べた「玄象」と共に琵琶としては稀に見る名

器とされていた。平家が都落ちをする際であるから、どうでも良い話だが…。

一門都落（いちもんのみやこおち）のこと

平家一族一人一人の逃げ方について知らせて貰わなくても良い…とも思うが落ち目の平家がクロ―ズアップされる場面は漫才のネタでは無いが、此処だけである。平家物語巻第七の此の章段とその後「福原落」で遂に平家が本拠地に居られなくなる。ただ平家物語の淡々とした記述に従って読んでくると、無責任な言い方では有るが「是だけの顔ぶれが揃っていたならば「逃げるエネルギー」を少し変えれば攻めてくる源氏を防ぐことも出来たような気がする。全般的な流れとしては源氏株が上がって、平家株は下落一方では有るが、此の時に京都に攻めて来たのは木曾義仲の軍勢だけで、源頼朝は未だ関東で地盤固めをしていたに過ぎない。平家には「西国に行けば不利な態勢を挽回できる！」という思惑が有ったのであろう。十一月には木曾義仲が平家に書を送り「協力して源頼朝を討とう」と提案しているのである。（平家は是を拒絶して滅びた）

本文に入ると、平清盛の異母弟（母親は少年時代の源頼朝を助けた池禅尼・大納言頼盛も京都東山池殿に在った屋敷に火を掛けて出たのであるが、船着場に近い鳥羽の南に来たときに「忘れ物をした」と言っ

諦めたように「長年の恩を忘れ苦境にある平家を見捨てるような者に腹を立てても仕方がない。放っておけ！」と言った。

兵衛盛次も諦めて追うのを止めた。宗盛は思い付いたように「ところで、小松殿（重盛）の若武者たちはどうなっている？」と聞いた。盛次が言い難そうに「未だどなたも見えて居られません！」と答えると、傍に居た新中納言（知盛）が涙を流して「都を出て未だ一日も過ぎ無いのに、早くも一族の心が変わってゆくのは悲しい。是からの行く末を思うと、どうなることか…このようなことがあるから（私は）都に留まって戦おうと言ったのに！」と、京都撤退を決めた総大将の宗盛を恨めしそうに睨（にら）みつけたのである。

そもそも池殿こと平頼盛が京都に留まろうとする理由は何かと言えば、源頼朝が常日頃から頼盛のことを気に掛けて「貴方の事は粗略に思っていない。今は亡き禅尼（頼盛の母）がお居でになると思っ

て申し上げます」と、度々、書状で申し入れていたからである。その上に、平家討伐に向かう諸将に対しては「決して池殿（平頼盛）の軍勢に向かつて弓を引いてはならぬ！」と厳しく申し渡していた。頼盛は、それを知っていたから「一門の命運が尽き平家が都を捨てた今こそ、頼朝に助けて貰おう…」と考えて都に戻ったのである。

戻っても平家が捨てた都であるから頼る所もないが、平頼盛は取り敢えず仁和寺の近くにある八条女院（鳥羽天皇の第三皇女・暲子内親王の居られる仁和寺山荘・常葉殿を訪ねた。それは頼盛の奥方が宰相殿と言う女房（院の乳母の娘）であつた関係だからである。其処で「何事か有った時には、どうか頼盛を助けて下さい…」と嘆願したけれども、女

院も「今の時代は先行きがどうなるか分からないから…」と頼り無さそうに言われるばかりである。源氏の時代になって頼朝は好意的であるにしても、他の源氏方の武将たちが平家の大物を護つてくれるとも思われない。平家一門から離れてしまった今は中途半端な立場にあつて何とも落ち着かない惨めな心境に置かれている。

一方、平家方では小松殿の若君たちが三位中将維盛をはじめとした兄弟六人で千騎ほどの軍勢を率い、淀の辺りで安德天皇の行列に追い付いた。待ち焦がれていた宗盛が、嬉しい中にも「今までどうしていたのか？」と問えば、維盛は「幼い者たちが余りに慕うので、それを宥（なだ）めるのに手間取りました」と答える。宗盛は「どうして家族を伴つて来なかったのか！それならば心配も要らないのに…」と、少し咎めるように言つたのだが、維盛は「行く末が心配だからです…」と、辛そうに答えて涙ぐんでいるのが悲しい。こうして平家一門は西国に落ちて行く訳であるが京都に攻め寄せて来たのは木曾義仲の軍勢だけである。如何に負けが混んでいるとは言つても天下に号礼していた平家が碌に防戦もせずに然も京都に火を掛けて逃げて行く、と言うのは情けない。決断したのは清盛の後継者・平宗盛である。

平家に借りが有る訳では無いが、平家の始祖の出身地・常陸国の住民として脱線して言い訳をする。と宗盛は清盛の子では無いとする俗説がある。

清盛の長男・重盛の母親は高階系の女性であり早逝して、後添えに入つたのが平時子である。清盛は純粹の平氏系男児が欲しくて時子に「是が非でも男児を産め！」と命じた。養鶏所の雌鶏では無いから生み分けが出来ない。時子は女兒を生んだ。清盛に怒られると考えた時子は、同じ頃に

生まれた下町の職人の子と交換した…と言う。真偽の程が定かでない話は忘れて頂いて、寿永二年（一一八三）七月二十五日に安德天皇を連れて都を離れた平家の主要名簿は次の通りである。

（順に列記）

前内大臣	宗盛（清盛の三男、後継者）
大納言	時忠（清盛夫人・時子の兄か弟）
中納言	教盛（清盛の弟）
中納言	知盛（宗盛の弟）
修理大夫	経盛（清盛の弟） 從四位の職
右衛門督	清宗（宗盛の子） 右に同じ
本三位中将	重衡（清盛の五男） 中將も四位の職
右に同じ	維盛（重盛の長男）
新三位中将	資盛（維盛の弟）
越前三位	通盛（教盛の子）
藏人頭	信基（天皇の側近、時子一族か？）
讃岐中将	時実（時忠の子） 讃岐守は五位の職
左中将	清経（維盛の弟） 中將は四位
小松少將	有盛（右に同じ） 少將は五位
丹後侍從	忠房（右に同じ） 侍從は五位の職
皇后宮亮	経正（経盛の子） 皇后付き、五位
左馬頭	行盛（清盛の孫 早世した基盛の子）
薩摩守	忠教（清盛の末弟）
能登守	教経（教盛の子）
武藏守	知明（知盛の長男）
備中守	師盛（重盛の五男）
淡路守	清房（清盛の七男）
尾張守	清定（清房の弟）
若狭守	経俊（経正の弟）
兵部少輔	正明（藤原氏である） 五位の職
藏人大夫	成盛（教盛の子） 天皇の側近
大夫	敦盛（経盛の子、淳盛とも書く）

※「大夫」は皇族の側近として仕える者

其のほかに二位の僧都（僧正に次ぐ高位の僧）専親（藤原氏であるが清盛の妻・時子の甥、法勝寺就行事務長 能円、中納言律師（僧正、僧都に次ぐ 仲快（平教盛の子とされる）、経誦房阿闍理祐円（此の人も平経盛の子とされる）など平家に所縁の有る僧籍の者が従い、武士階層では諸国の国司、檢非違使（司法職員、宮中警護の重責に在る者から諸官庁の高級公務員まで百六十人と、武士団総勢七千余騎が従つたけれども、是は東国や北国などの合戦に加わつて、此の数年間に負け戦で討ち取られた兵力の残党に過ぎ無かつた。

平家の行列は京都を出てから山崎関戸の院（現在大阪府に入る山城国と摂津国の境）に着いて先ず安德天皇の輿を下ろしてから石清水八幡宮を遙拝した。大納言・時忠が「南無帰命頂礼八幡大菩薩、君天皇を始めとして我ら平家一同を、都へ歸し入れ給え…」と祈られたのは悲しいことであるが、平家は勝手に都を捨てて来たのであるから神様も返事のようにがない。

一同が逃げて来た京都のほうを振り返ると遠くないのに空が霞んでいるように見えて、自分たちが放火してきた大火事の煙だけが立ち登るのが、何とも心細い。了見違いだとは思うが、こういう場合でも風流の心は忘れないと見えて中納言教盛が次の様な歌を詠んだ。

「はかなしなぬしは雲井にわかるれば

跡はけふりと立ちのぼるかな」

其れに続いて弟の修理大夫経盛も無責任な歌を…。「ふるさとを焼け野の原にかえりみて

末もけふりの波路をぞ行く」

自分達の故郷を一片の煙に隔てて見通しの無い前途万里の遠路を落ちて行くのであるから、其の心のうちを推し量れば哀れであるが（庶民の立場から

言えは自業自得であるが、火を掛けられた京都の市民は、どうすれば良いのか！

突然だが「平家物語」原本でも此処で急に話が變わつて、平清盛の股肱の臣（こうのしん）最も主君の信頼を受けた家臣と言われた肥後守平貞能は、淀川の河口辺りに源氏軍が居るといので蹴散らそうと五百余騎を従えて向かったけれども、是がデマだと分かつて引き揚げて来る途中で総退却をして来た平家の集団に行き会った。貞能は総大将の宗盛の前に行つて「是は皆さんお揃いで何処へ疎開されるのですか！もし西国へ下られるのであれば、落人（おちうど）負けて逃げて来た者として、そこかしこで討ち取られて不名誉な最後を遂げることにします。それは武士として悔しいことでしょう。都に留まつて戦えば道は開けると思ひます。どうか考え直してください」と申し入れたのである。それに対して宗盛は「貞能は知らないか：既に木曾義仲の軍勢五万余が北国から攻め込んで来て比叡山・坂本辺りに満ち満ちている。法皇様も昨夜から何処かに疎開をされて都には居られない。我々平家の武士だけならば、どうにかなろうが、女院（天皇生母）、二位殿（清盛未亡人）などに辛い思いをさせることも出来ないで、こうして行幸をお願いし、取り敢えず都を離れることにしたのである」と言われた。

それを聞いた貞能は「その様なことであれば、此の貞能は平家にお暇（いとま）を給わつて（別行動を取らせて頂いて）都に戻り、自由に活動をさせて頂きます」と言つて、自分に従つていた五百余騎を平重盛の子らに付けて、自分は手元に置いた三十騎程を引き連れ都に引き返した。

一方、京都では「平貞能が、京都に残つた平家に従わずに者たちを征伐に来る！」という噂が広が

つたので池大納言が「それは此の頼盛のことであろうか？」と大いに恐れていた。貞能は大胆にも西八条の平家屋敷跡（焼け跡）に仮設天幕用の大幕（平家の紋章が付いた）を張り巡らせて一夜を明かしたけれども、源氏軍も攻めて来ず、平家の関係者も訊ねて来なかった。さすがに寂しくなつて其処を立ち退き、京都南部の法性寺に置かれていたという平重盛の墓に向かった。

巻第七「維盛都落」でも触れたが、貞能は「小松殿の墓が源氏に荒らされては一大事！」と家臣に命じて墓地を掘らせ、遺骨を回収して泣く泣く「ああ、何と情けない。平家一門の行動をご覧ください。生ある者は必ず滅びる。楽しみ尽きて悲しみ来ると、古来から書物に書かれたことですが、（今回の都落ちで）それを目の当たりにして是ほど悲しいことはありません。重盛公は、それを先ず覺られて兼ねてから神・仏の教えを守り平家没落を目にすること無く他界されました。有難いことです。其の時に、この貞能も最後のお供をすべきところ、甲斐なき命を長らえて、今は（平家没落の憂き目に遭いました。もし、私の命が尽きる時には必ず同じ仏土に迎えて下さい：」と泣きくどき、重盛の遺骨を高野山に送り、墓所の土を賀茂川に流させた：と原本に書いてあるが是は平貞能の作戦であり「維盛都落」で書いたように平重盛の墓は常陸国に堂々と現存している。それを暗示する此の章段の記事：貞能は平家一門とは反対の東国へ落ちて行き、宇都宮朝綱（聖主臨幸参照）が是を助けた。重盛の墓は宇都宮に近い。

福原落（ふくはらおち）のこと

どうせ落ちるのなら思い切つて一気に落ちれば

：と思わないでもないが平家物語の巻第七は「○落」が多く、此の「福原落」で一段落する。

源氏（当面は木曾義仲の軍勢だけであつたのだが）に攻められて、京都を放棄した平家軍の首脳部は、平重盛の子である小松三位中将維盛の他は家族同伴であつたけれども、一般その他大勢の武士たちは全ての家族を同伴出来ないから、都に残された者たちには何時会えるのか分らない。家族を捨てて逃げたことにもなる。誰でも別れに際しては「次の再会」を約束するのだが都を放棄するのであるから明日の予定を建てようがない。去る者も残る者も相互に涙に暮れるだけである。

平家軍に従う者は先祖から仕えていた者が多いから其の恩を忘れることが出来ないけれども心残りはあるから、老いも若きも後を振り返り振り返り別れを惜しんで、平家軍の行進は遅々たるものになった。この一行は或いは船の上で磯に打ち寄せる波音を聴きながら、或いは遠い野原を辿り、或いは険しい山路を辿り、思い思いに落ちて行つた：と原本にあるから、一時期かも知れないが平家軍はバラバラに逃げたのであろうか：そうだとすると、それ以後の合戦に勝てる道理が無い。

安徳天皇を始めとして平家の主力は取り敢えず福原の旧都（かつて平清盛が都を遷した場所）に着いた。平宗盛は高齢者も若者も含めて主だった武士数百人を集め図々しくも「是まで平家が行なつてきた善行の報酬が尽きて、悪行の報いだけが此の身に及んで来た為に、神仏にも見放され後白河法皇にも捨てられて都を後にして来た。是からは旅の空に雲のように漂（ただよ）う身になつてしまつたからには、何を頼みとするか当ては無いが、知ら者同士が同じ木陰に身を寄せるのも前世の契（ちぎ）りが浅からず。同じ流れに従うのも多生の縁が尚

深いからである。ましてお前たちは一時的に平家の家臣になったのでは無く先祖代々の平家の武士である。或いは近親者としての交流が深い者も居り、或いは重代の恩が深い者も居る。何れも家門が繁盛していた頃は平家の恩に依って生計を立てることが出来ていた。その恩を思い自分を顧みる時に、それに報いるのは今である。何よりも十善帝王と言われる天皇が三種の神器と共に此処に御居になる以上は、如何なる野の果て、山の奥までも行幸のお供をしようとは思わないか：私は、そう思う」と、自分勝手な大演説をブチ上げた。

其処まで言われると「違います」とも言えないから、家臣たちも義理で涙を流して申し上げた。「鳥や獣でも恩に報い徳に感じる心は有ると言います。申し上げるまでもなく我々は人の道を心得ておりますから平治の乱以降、平家の繁栄期に、恵まれた環境で家族を養うことが出来た御恩は忘れておりません。何よりも弓矢取る身として主君を裏切るなどの行為は最大の恥とするところですから、この後は日本を出て新羅・百済・高麗・刑旦（けいたん）きったん、モンゴルでも、何処でも、雲の果てまで天皇のお供をして参り、どの様なことになるうとも構いません：」是を聞いた平家の幹部たちは頼もしく思ったのである。

その様な事で平家の集団は福原の旧都に一夜を明かした。季節は秋の初めであり（旧暦七月下旬）下弦の月は未だ出ない。逃げる途中の平家は天皇は別にしても宿舎で安眠と言う訳にはいかない。

かつて平清盛が新都として建設した福原は、春が花見の岡、秋は月見の濱に御所を置き、それを囲むように置かれた泉殿、松陰殿、馬場殿、二階、棧敷殿、雪見御所、萱の御所などから一族の人々の館、或いは五條大納言・藤原国綱が命令を受け

て新設した仮御所の鴛鴦（おしどり）の瓦、玉の石畳など、いずれも三年の間、放置されていたので見る影は無く、古い苔（こけ）が道を塞ぎ、秋草が門を閉じさせ、屋根瓦には手入れをしない松が覆い被さり、垣根には蔦が絡み、高樓は傾いて苔（こけ）むし、松風が吹きぬけて簾（すだれ）は落ち、室内が丸見えになっていて其処に月影が差しこむほどに荒れ果てていた。

一時的には其の場所に宿泊するほかは無かったから一番良い部屋に天皇を泊めて、翌日には火をつけて燃やした。後は港から船で行く。しかし連絡船では無いから行く先は決まっていけない。原文には「海人（あま）の焚く藻塩の夕煙、尾上の鹿の曉（あけ）の声（めけ）方に山の尾根から聞こえてくる鹿の声、渚（なぎさ）々に寄する浪の音、袖に宿借る月の影、千草にすたたく（集まって鳴く）キリギリス、全て目に見え、耳に触れること、一つとして哀れを催し、心を痛ましめずと言うことなし」と丁寧に書いてあるが、逃げて来て行く当てが無いのであるから淋しい話にしかない。

思えば昨日は東関（都の東方に在った逢坂の関）現在の大津市に在った関所・おうさかのせき の麓に馬の轡（くつ）を並べて十万余騎の軍勢を誇った平家が、今日は西海の浪に纏（まと）もつな港で船を繋ぐ綱を解いて七千余人（負け続けた合戦で兵力が激減した状態で）雲が垂れ込め、早や日は沈もうとしている中を孤島に立ち籠める夕霧に遮られながら海上に浮かぶ月を頼りに当ても無く西国に向かって行く。

遠く離れた見知らぬ海の浪を分け潮の流れに引かれて行く船が、さながら中空の雲を遡（さかのぼ）るように（困難な旅路を辿るように）見えたのである。船の旅が幾日も続いて思い起こせば都は既に幾山川を越す程に遠く、雲の彼方（かなた）の

国になってしまった。「遙々と（落ちて）来たもの」と思うにも、先立つものは尽きせぬ悲しみの涙である。平家の管理職？たちは、気晴らしに浪の上を飛ぶ白い水鳥の群れを眺めては「あれが、その昔、在原の某（なにが）の隅田川で詠んだ歌に出て来る名も愛らしい都鳥で有ろう：」と、少ない話題にしているのも哀れである。

船旅で退屈している平家にサービスする訳では無いが在原の業平について述べて置く。此の人は平家の始祖とされる桓武天皇の曾孫に当る人物であり、平城天皇の第一皇子・阿保（あほ）親王の子になる。平城天皇の評判が悪かったので皇統から外されたが、此の系統が直系になる。在原業平の母親は桓武天皇皇女（伊都内親王）である。

業平は右近衛権中将に任官した。平安前期の六歌仙、三十六歌仙の一人とされた。清和天皇時代に母親の喪に服する為に官職を辞して各地を旅したと言われる。平家物語に出て来た隅田川の歌は「名にしおはばいざ言問はむ都鳥

わが思ふ人はありやなしやと」であり、現地に「言問橋」と言う駅名が残っていたが「東京スカイツリー」に変えられてしまった。平家を始め、怒っている者が大勢居ると思う。それは兎も角、寿永二年七月二十五日、平家は都を落ちていったのである。（巻第七 終り）

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは右記会員まで。白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の文庫

会報「ふるさと風」に掲載してきたものを、文庫本に編集し、石岡市まちかど情報センター、いしおか育ち他で販売しております。お問い合わせは編集事務局へ。



ふるさと風の文庫の主な作品

- ・打田 昇三…打田昇三全集（全 6 巻）、
歴史の嘘、私本平家物語、
私本将門記他
- ・兼平智恵子…歴史のさといしおか散歩、
ふるさと風のことば他
- ・伊東 弓子…風の景他
- ・小林 幸枝…風に舞う他
- ・菅原 茂美…遙かなる旅路（1、2）
- ・木村 進 …地域に埋もれた歴史シリーズ
（全 24 巻）
石岡地方のふるさと昔話、
茨城のちょっと面白い昔話他
- ・白井 啓治…皇帝ペンギンの首飾り、
霞ヶ浦の紅い鯨、
朗読/ふるさと物語…他

ふるさと風劇団「ことば座」団員&朗読教室生募集

劇団員の募集

ことば座は、霞ヶ浦を中心とした「ふる里物語」を朗読手話舞と朗読劇に表現する劇団です。

ことば座では、スタッフ部門・俳優部門の団員を募集しています。

ふる里劇団に興味をお持ちの方の連絡をお待ちしています。

朗読教室生の募集

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることを言います。何かで自分表現をしたいと考えておられる方、朗読による自分表現を考えてみませんか。演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。月 1 回コース(受講料:¥6,000 円) 2 回コース(受講料:¥9,000 円)

ふるさと風の会編集事務局

〒315-0001 茨城県石岡市石岡 13979-2 TEL 080-3125-1307